324
348

始

324
148

# 菩提心論講義

324-348

# 菩提心論講義

大正
2. 6. 27
内交

# 序言

高祖弘法大師、立教開宗の根本要義は、聚まりて此一論中にあり。大師は陽に大日經、並に金剛頂經の兩部の秘經に依りて、千古未發の妙宗を開き玉ひしも、熟々其由來を考ふるに、三地の薩埵の靈眼を以て、此一部の論を精讀翫味し、之れに依りて得たる靈知靈感の具體的顯現、是れ即ち眞言宗なりと云ふも敢て過言にあらざるべき歟。大師立教開宗の精要は、即身成佛義、辯顯密二教論、並に秘藏寶鑰に於て、歷々之を覗ふことを得可し。而も此等諸論の根幹樞軸を爲すものは、吾人實に此一論なりと斷言するに敢て憚らざるものなり。

辯顯密二教論卷上に云く、

此論は龍樹大聖所造の千部の論中、密藏肝心の論なり。是故に顯密二教の差別淺深、及び成佛の遲速勝劣、皆此中に說けり。と

由是、大師芳志の一端を推すに難からざるべし。

今當論一部の內容を略說すれば、全編四章より成り。第一章總論に於て、眞言行者は、須らく先づ菩提心を發し、之を以て修行始終の眼目と爲すべきを勸誡し、且つ顯密淺深の不同を明記し。第二章行願の菩提心に於て、行者は必ず利他の誓願を樹つべきを諭し。第三章勝義の菩提心に於て、下は人天の敎より、上は華天の敎義に至る迄、逐次說き來りて、淺深廣略の旨を明し。第四章三摩地の菩提心に於て、金界の月輪、胎藏の阿字、此の阿字と彼の月輪とは、共に兩部の精眼なり。此兩部の精眼を提げ來りて、之を行者の實修實行に適用し、斯くて自心の實相を諦觀せしむる行相を示す。

行願・勝義・三摩地の三種の菩提心は、次の如く悲智定の三德なり。此悲智定の三德を、具體的に見れば、是即ち大日法身にして、之を抽象的に名くれば則ち菩提心なり。故に三種の菩提心は、宛然是れ渾一なれども、人をして解し易からしめんが爲に、暫らく三種に區分するのみ。以是、行願の菩提心も、他の二種の菩提心の深意を汲んで解せざれば、動もすれば顯敎所談に混するの恐れあり。勝義・三摩地の二菩提心を說くに亦同じく此注意を要す。

古來行願と勝義との二章は敎相なりとして、何人も講ずることを得れども、獨り三摩地の一章に至りては、事相なりとし

て、阿闍梨の傳授に讓り、猥りに講述せざるを例とす。今は講述の次でに、三摩地の章を說く。但し實修實踐を志すものは、更に明法の阿闍梨に付て、口傳を受くべし。

當論は密藏肝心の論なるが故に、苟も眞言宗の何にたるを知らんと欲するものは、必ず先づ此論を一讀せざる可らず。故に古來此論の註釋を作るもの頗る多く、今現に世に行はるゝものは左の如し。

| | | |
|---|---|---|
| 菩提心論私記 | 四卷 | 南岳坊濟暹 |
| 菩提心論鈔 | 三卷 | 光明山重譽(實範付法) |
| 同 | 三卷 | 正智院道範(靜遍付法) |
| 同 | 十卷 | 寶性院宥快(興雅付法) |
| 同 | 六卷 | 觀智院杲寶 |
| 菩提心論明鏡勘文 | | 道範 |



| | | |
|---|---|---|
| 三種菩提心義 | | 同 |
| 菩提心論口訣 | 一卷 | 宥快 |
| 菩提心論問題 | 二卷 | 快全 |
| 菩提心論秘釋 | 一卷 | 鑁上人 |
| 菩提心論初心鈔 | 二卷 | 中性院賴瑜 |
| 菩提心論愚草 | 四卷 | 同 |
| 菩提心論教相記 | 二卷 | 亮汰 |
| 菩提心論文林 | 一卷 | 小池坊尊祐 |
| 菩提心論撮義抄 | 二卷 | 空覺々眼 |
| 菩提心論卓義 | | 海運 |

已上是れなり。本論の作者に關しては、議論頗る多く、他家の學者は、不空三藏の作なりと爲し、東密一家は當論を以て、飽迄龍猛大德の眞作なりと主張す。若し夫れ研究的態度に依らば、

斯の重大問題を閑却する能はず。去れど、予は今研究的態度を避けて、専ら初心の知識に入り易からんことを努め、随て本文に直接關係なき問題は、之を他日に譲り、且つ其解釋法の如きも、往々卑見を加へたる所あり、本論を章節に分類して、覧者の便を計りたるか如き其一例なり。

本書は、余が先般著したる菩提心論講錄中より、平易なる部分を摘採したるものなり。以是、本講義は、述者自ら完壁を以て目するものにあらず。然れど眇たる此一小册子に憑りて、眞言宗の眞意義を、幾分世に公にするを得、又密教研究の端緒を開くことを得ば、述者の満足何物か之れに加へん

大正二年五月

東京　神林隆淨

# 菩提心論講義目次


第一章　總論……一

一、題號……一

二、當論作者……三

三、當論譯者……四

四、發菩提心の勸誡……六

五、修行……一〇

第二章　行願の菩提心……一四

一、行願の意義……一四

二、利益の意義……一六

三、安樂の意義……二〇

第三章　勝義の菩提心……二二

第一節　淺略の勝義……二二

一、勝義の意義……二三

二、凡夫の狀態……二四

三、外道の厭ふべきこと……二六

四、二乘法は至極に非ず……二八

五、大乘法も尙ほ樂ふに足らず……三七

六、眞言行者は二乘並に菩薩に超越す……三九

第二節　深秘の勝義……四一

一、大意……四一

二、迷界の諸現象……四二





三、諸佛慈光の發現……四四

四、一切法無自性……四七

五、悲智は如來の本質……五〇

第四章　三摩地の菩提心……五六

一、諸佛說法の由來……五六

二、月輪觀……五八

三、金剛界十六尊と月輪の十六分……六二

四、阿字義並に阿字觀……七六

五、五相三密の秘觀……八四

六、行者に對する勸誡……九二


菩提心論講目次終

諸の菩薩摩訶薩、初發心より、諸佛世尊に親近し供養し、諸佛の所より契經乃至論議を說くを聞き、聞き已て、受持し、轉讀し、溫習して、善く通利せしめ、既に善く通利せば、理の如くに思惟し已て、深く意趣を見、意趣を見已れば、能く善く通達す、既に善く通達すれば陀羅尼を得、無礙の解を起し、乃至無上菩提を證得し、所生の處に隨て、聞持する所の正法の教義に於て、常に忘失せず。諸佛の所に於て、廣く善根を殖ゑ、善根力に任持せらるるに由るが故に、惡趣に墮せず、善根に攝受せらるるに由るが故に、意樂淸淨なり、淨意樂の力に攝持せらるるが故に、常に能く無倒にして、有情を成熟して、佛土を嚴淨す。又善根に攝持せらるるに由るが故に、恒に眞淨の善友に遠離せず。

（大般若經第五百二十六）

通俗叢書
第三編

# 菩提心論講義

文學士　神林隆淨述

## 第一章　總論

### 一、題號

金剛頂瑜伽の中に阿耨多羅三藐三菩提心を發す論。

（講義）

先づ當論の梵名を掲ぐれば、Vajra（金剛）sekhara（頂）yoga（瑜伽）anuttara（阿耨多羅）samyak（三藐）sambodhi（三菩提）Hṛdaya（心）utpāda（發生）s'astra（論）

次に字句を釋すれば金剛頂瑜伽とは金剛頂經を指す。

如來の不壞金剛の智體は世間に於て最上なるが故に金剛頂と名く（教王經開題

參看）、瑜伽は女聲に呼んで瑜祇(Yogī)と云ひ、共に相應と譯す、是れ行者の觀念と修行と悉く實相の理に相應合するを意味す、金剛頂經は行者大日如來の智體に流入する行相を示すが故に、一に金剛頂瑜伽經の稱あり。阿耨多羅は譯して無上と云ひ、三藐は譯して正等と云ひ、三菩提は正覺と譯す。外道の邪覺を簡ふて佛の覺りを殊に正覺と云ひ、聲緣二乘の單に人空の理を證する偏覺に對し、佛は人法二空の理を等しく覺證し玉ふが故に等覺と云ひ、菩薩は人法二空の理を證するも尙ほ一分の無明あるに對して佛の覺りを無上と云ふ。心に二種あり、一を質多(Citta)と云ひ、之を慮知心と譯し、二を干栗馱(Hṛdaya)と稱し、處中心若しくは眞實心等と譯す、今は第二の心に當る。題意を要約すれば、金剛頂經の中に說ける所の佛陀の覺りの心を發起すべきを決釋する書なりとの意なり。

亦は瑜伽惣持教門に、菩提心の觀行を修持することを說く義と名く。

（講義）此の題號も前と同意にして、寧ろ前の題號の意を說き示したるものに外ならず、瑜伽惣持教門とは金剛頂經を指す、中に於て惣持とは眞言の別名なり、眞言は一字に千理を含むが故に惣持の名あり。

## 二、當論作者

龍猛菩薩造

（講義）菩薩とは具なる梵名には菩提薩埵(Bodhi-sattva)と云ひ、覺有情若しくは道心衆生等と譯す、即ち道心を有する衆生を菩薩と稱す。此の菩薩は大悲に住して、普く法雨を灑て群生を利益すること、恰も大龍の無邊の雲雨を發して、草木を濕すに似たり、故に龍と云ひ、外道邪見を破斥すること極めて勇猛なるが故に猛と云ふ。梵には那伽閼頼樹那菩提薩埵(Nāgārjuna-bodhi-sattva)と云ひ、舊譯には龍樹と翻し、新譯には龍猛或は龍勝と云ふ。釋尊滅後八百年に出て、概ね憍薩羅(Kosala)に住し、引正王(Śatavāha)の歸依を得、千部の論を造りて、邪を破し正を樹てり、是れ眞言付法第三の祖師なり。（西域記第十、付法傳參照）

## 大興善寺の三藏沙門大廣智不空奉詔譯

（講義）

大興善寺とは李唐の大宗皇帝の御願寺なり、隋の文帝開皇二年に城門宮殿等に皆な大興の字を加ふ、今の寺は其一なり（貞元錄第十參照）大唐の長安に十大寺ありて左右に列峙せり、今の寺は其の一にして左衞にあり。寺とは梵語に毗訶羅（Vihāra）と云ひ、衆園又は僧園と翻す、寺は衆人の居住する所なるか故に此名あり、又は遊行所と云ふ、衆僧の遊行する所なるが故なり。隋の煬帝の時に、天下の寺院を道場と改稱し、唐に至て寺と號するに至れり（宥快鈔第一參看）三藏とは梵に Tri-piṭaka と云ひ、ピタカとは篋にして、經文を入れ置く器なり、トリとは三にして經律論を指す、今は經律論の三篋に通達せる人を指して三藏と云ふ。藏と篋とは義相通ずるが故に三篋と云ふべきを三藏と稱するなり。沙門とは具なる梵名には沙迦懣曩 S'ramana 又は S'amana と云ひ、勤息又は勤行と譯す、是れ戒定慧の三學を勤修して、惑業苦の三道



を止息する意なり。大廣智不空とは、大廣智は、此三藏が仁王經を譯せられし時に、代宗皇帝より賜りたる稱なり、是れ智德の廣大なるを意味す。不空とは金剛名號にして、入壇灌頂登壇散華の時に、北方不空成就佛に投華せしが故に、此の金剛號を阿闍梨耶より給はりたるものなり。不空は梵に阿目佉（Amogha）と云ひ、北天竺婆羅門種族にして、幼名を智藏（Prajñā-koṣa）と稱し、十四歲の時に闍婆國（Java）に於て、金剛智三藏に師事し、開元六年師と共に唐に來り、玄宗・肅宗の三朝に皆な灌頂の國師と仰がれ、殊に代宗皇帝の時に特進大鴻臚の官位を以て褒表せられ、且つ法號を大廣智三藏と賜はれり。金剛智は開元二十九年に沒せられ、三藏は師の遺命を奉して、大本の金剛頂經、並に大本の毗盧遮那經を請來せんが爲に、同年南海より師子國に至り、龍智阿闍梨に師事して兩部の大本を得て、唐の第七主玄宗皇帝の天寶五年に歸唐せられ、是れより三朝の歸信を受け、密藏の翻譯に殆んど全生涯を捧げ、大曆九年六月十五日示寂、時に春秋七十。（表製集第六、貞元錄第十四、付法傳參看）

奉詔譯とは是れ國王の聖命を承けて翻譯する意なり。當論には既に大廣智の敕號を記載するを以て、是れ蓋し代宗皇帝の勅に依りて譯せられたるものならん歟。

## 四、發菩提心の勸誡

大阿闍梨の云く、若し上根上智の人有て、外道二乘の法を樂はず、大度量あつて、勇鋭にして惑なからん者は、宜しく佛乘を修す可し。

（講義）阿闍梨とは舊譯の梵語にして又たは阿祇利とも云ふ。新譯の梵語には阿闍梨耶(Acārya)と云ひ、舊譯には軌範、敎授若しくは親敎等と翻じ、新譯には傳敎、正行、傳授者等と譯し、時に或は明解師又は剃髮師等と飜す。論の卷頭に先づ傳授者の言を擧ぐるは、師資相傳の重んずべきを表す宗秘論に「玉印金箱は、帝々相付し、眞言密印は佛々相傳す」とあり、猶ほ委細は付法傳、並に鑁上人の題釋を見よ。今の傳授者は、出生義及び貞元錄等の說に依り、龍樹大士の師たる金剛薩埵なりとす。大日經疏第三に「三密を解する人の中に於て、最も上首とする金剛薩埵の如き、是を阿闍梨と名く」とあり、是れ金剛薩埵を阿闍梨と稱する證なりとす。上根上智とは勢力絶大にして智慧の勝れたる人を云ふ。佛乘とは今は眞言敎を指す、眞言は即身成佛の敎なるが故に殊に無上最上佛乘の名あり。次に此の一段の大意を述ぶれば往昔龍猛菩薩南天竺鐵塔の中に於て入壇受法の際に、金剛薩埵親しく龍猛大德に告げて曰く、若し夫れ上根にして難信の秘密敎を信じ、上智にして難解の陀羅尼宗を了悟し得る者あらば、諸の外敎若しくは顯敎の大小二乘を研修するを息め、大度量にして勇鋭無惑のものは須らく秘密佛乘の法園に遊んで、五相三密の寶輅を驅て、彼の本覺莊嚴の金城に趣くべしと。



當に是の如くの心を發すべし、我れ今阿耨多羅三藐三菩提を志求して、餘果を求めずと誓心決定するが故に、魔宮震動し、十方の諸佛皆悉く證知し玉ふ、常に人天に在て勝快樂を受け、所生の處に憶持して忘れずと。

（講義）我とは眞言行者自身を指す。餘果とは外道二乘の行果を云ふ。魔宮とは之れに淺

深の二意あり、淺意には、第六天の魔王の宮殿を云ひ、深意には、我等衆生の根本煩惱を云ふ。此の一段の意は、金剛薩埵尙ほ語を續けて龍猛大德に告げ玉ふに、眞言行者たるもの、先づ下の如き心を發さざる可らず、我れ今より以後無上正覺を志念欣求して、外道二乘の行果を願はざるべし。と、此志念旣に堅固不動なるが故に內外魔界の宮殿は震撼動搖し、遍虛空の十方三世の諸佛諸薩埵は、皆悉く此初發心菩薩の成道を證明知見し玉ふらん、若し夫れ斯くの如くならんか、常に人中天上に遊歷して、無上の法輪を轉じ、勝妙の快樂を享け、六趣所生の一切時處に於て、發菩提心を憶念して決して廢忘せざるべしと。

若し瑜伽の中の諸の菩薩の身を成せんと願ふ者をも、亦發菩提心と名く、何んとなれば、次でたる諸尊は、皆大毘盧遮那佛身に同なればなり。

（講義）

瑜伽の中の諸の菩薩の身とは、金剛頂經に出す所の三十七尊の中、大日如來を除て、餘の三十六尊を指す。意は若し行者有て、普門大日尊の身を證成せんとは願はず、金剛頂經に示す三十七尊中の餘尊の身を證成せんと願ふものをも、矢張發菩提心と名くることを得、聖位經に「自性及び受用、變化並に等流の佛德三十六は、皆自性身に同じ」とあり、又禮懺經に「金剛界大曼荼羅三十七尊は、並に是れ法佛の現證菩提の內眷屬、毘盧遮那の互體なり」とあり、由是、曼荼羅會中の諸尊聖衆は、皆悉く普門大日の萬德の顯現にして、本法身の大日と同一無二なり、故に一門の菩薩の身を證成せんと願ふものをも、亦發菩提心と名くることを得るなり。

人の名官を貪する者は、名官を求むる心を發して、名官を求むる行を修し、若し財寶を貪する者は、財寶を求むる心を發して、財物を經營する行を作すが如し。

（講義）

此は喩を以て眞言行者に發菩提心を勸諭する一段なり。我々迷界の衆生にして、迷を轉して、悟りの境界に入らんと欲せば、先づ須らく其れに對する熱烈なる志望を發さざる可らず、恰も名譽高官を得んと欲する者、先づ其を求むる心を發して、而して後に其を理むる行を修し、若し又器財珍寶を欲する者は、先づ器財珍寶を志求

する心を發起して、種々の財物を經營する行を作すが如し。

凡そ人の善と惡とを爲さんと欲する者は、皆先づ其心を標して、而して後に其志を成す、所の以に菩提を求むる者は、菩提心を發して菩提の行を修す。

（講義）凡そ人は其善事なると惡事なるとを問はず、苟も或何事かを爲さんと欲する者は、皆先づ其志を標顯して、而して後に其志を成就せんと欲する者なり、是故に覺悟の妙境に進まんと欲する者も、須らく先づ其意ばせを發して、其妙境に至るべき妙行を勤修せざるべからず。

## 五、修行

既に是如くの心を發し已て、須らく菩提心の行相を知るべし、其行相とは三門を以て分別す、諸佛菩薩、昔因地に在して、是心を發し已て、勝義・行願・三摩地を戒と爲し、乃し成佛に至るまで時として暫くも忘るゝこと無し。

（講義）諸佛菩薩と云へる中の菩薩とは、從果向因の尊なり、故に昔在因地と云ふ。昔在因地とは成道の當位より因位を指して名く、密敎は一生頓悟の宗なるが故に、隔世の昔を指すに非ず。此の一段の意は既に發心し已らば、次に須らく覺悟の妙境に到るべき修行方法を知るべし、謂ゆる菩提心の修行方法とは、勝義・行願・三摩地の三種に區分して說くことを得べし、十方三世の諸佛諸薩埵は往昔因地に在ませし日、本法身に迷ひ給ひたること、我等凡夫と毫も異ることなかりき、然に永劫の夢醒め、法界力に加持せられ、內因外緣、交〻相應合して、遂に無上法に對して大信解を生じ、次て大精進心を起して、極めて勇鋭の菩提心を發し、斯くて灌頂師に從て、佛性三摩耶戒を受け、其れより以後大智慧の勝義、大慈悲の行願、大禪定の三摩地の三種の菩提心を以て戒とし、初發心時より、乃し大定智悲の三德の圓成せる佛果の位に至るまで一時一刻、暫くも遺忘し玉はざりき。（三摩耶戒序參看せよ）

惟眞言法の中にのみ、即身成佛するが故に、是れ三摩地の法を

説く、諸教の中に於て闕して書せず、一には行願、二に勝義、三に三摩地なり。

**講義**

眞言法とは法身如來、如義眞實の言を以て、如來內證智の境を演說し玉へるものを指し。次に即身成佛とは父母所生の肉身を轉捨せず、此の身此儘大日普門の果德を圓成すると云ふ。但し此義は眞言敎の中に於てのみ存し、顯敎の中に於て絕て是れなき所なり。法華經に八歲の龍女の速疾頓成道と云ひ、又處體經に魔梵釋女の現身成佛と云へるが如きは、皆な初住分證の成道にして、妙覺究竟の成道に非ず、彼龍女と云ひ、魔梵釋女と云ひ、共に眞如の一分を證悟して、八相作佛の相を現はしたりと雖ども、而も此は十住の位の成佛の儀相なり、之を分證の成道と名く、斯くの如き分證の成道すら、猶ほ生々世々の間に修行練熟し、偶々一乘の妙敎に値ふて、宿善開發して、頓に佛果を證得するを得、然るに眞言敎の中に於て說く所は、一向行惡業の初心の凡夫が、三密の妙敎に加持せられて、現在世に無上正覺を得可しと立つ、故に其の旨遙に異なれり、以是、即身成佛は獨り眞言特有の法門なりと爲す。三摩地(Samādhi)とは飜して定と云ふ、顯敎の中に無量の三摩地を說く、然るに此に三摩地と云ふは金胎兩部の精要たる五相三密の妙行、三部五部の祕觀を指す、故に顯敎に說く所とは大に其趣きを異にす。闕して而して書せずとは、三種の菩提心の中に於て、第三の三摩地の菩提心を指す、三種の菩提心の中、行願と勝義とは其深意大に相違するものありと雖ども、而も顯敎にも往々之れに類似せる說あり、然るに第三の三摩地たる五相三密の祕觀に至りては、餘敎に曾て無くして、獨り眞言法の中にのみ存す、宥快鈔第三に「五相三密等の三摩地の敎を說くをば眞言法と名け、此義を說かざるを顯敎と名く」とあり、實に五相三密の祕觀は眞言敎の特色なりと認むべきものなり。次に勝義・行願・三摩地の三種の菩提心は、佛自性の大定智悲の三德にして、謂ゆる行願の菩提心とは、有ゆる人類生物に對し、此等は悉く自身と同體なりと觀して、恰も自身を愛護するが如くに、他人を愛護し、彼等を導て皆無上道に誘引せんとする悲念を指し、勝義の菩提心とは、自性清淨の智光に照して、九種住心の眞實相を觀見し、前心後心、皆無自性なりと觀じて、劣を捨て勝を獲得する眞智を指し、三摩地の菩提心とは、五相三密の祕觀に依りて開發せる衆生心地の本法身の定德を指す。無

毘三藏の言く「三摩地とは、更に別法なし、直に是れ一切衆生の自性清淨心を名けて大圓鏡智と爲す、上は諸佛に至り、下は蠢動に至るまで、悉く皆同等にして増減あることなし」と云ひ、又高祖は三摩耶戒序に「所求の心とは、謂ゆる無盡莊嚴金剛界の身是れなり」と示し玉へり、謂ゆる所求の心は、吾人本來具有する所の自心の實際、身心の極致、悲智の本源たる微妙曼荼羅心是れなり。

# 第二章 行願の菩提心

## 一、行願の意義

初に行願とは、爲く修習の人、常に是の如くの心を懷くべし、我れ當に無餘の有情界を利益し安樂し、十方の含識を觀ること、猶ほし已身の如くすべし。

（講義）行願とは大悲心を指す、初の字を安するは、眞言行者は、須らく先づ大悲行願の心を發すべきを示す。三摩耶戒序に「大悲心とは亦は行願心と名く」と見ゆ、華嚴の清凉大師は行願を釋して「希欲を願と爲し、造修を行と爲す」と云ふ。自宗の意に依らば、行とは三密の妙行を云ひ、願とは五大願を云ふ。修習の人とは眞言行者なり。無餘とは餘すことなき意にして、即ち悉皆の義。有情界とは、人類並に生物等の有ゆるものを指す。利益安樂とは、世間並に出世間の幸福快樂を得せしむる意。含識とは意識を含有するもの、即ち有情と同意なり、大智律師の釋に「心は色の中に依れば、名けて含識と爲す」と云へり、是れ含識の意なり。己身の如しとは、同體の悲念に當る、宗教錄に「平等の一心に入らざれば、成佛の正意に違し、同體の大悲を了せざれば、愛見の妄見に墮す」と云ひ、又釋論に「一切衆生は平等々々、唯一眞如にして別異あることなし、衆生の身命と、及び我身命と一味一相にして相離れず」とあるは、即ち同體の悲念を示すものなり。此の一段の意は、眞言行者は、初發心の時に先づ下の如き決心を爲すべし、我當に同胞兄第をして、善行を修せしめ、善果を感受せしめ、斯くて彼等を利益し安樂せしめん、十方三世の蠢動含識は、本と我れと同體なれば、我れ如何んぞ之を默視するに忍びんやと。

## 二、利益の意義

言ふ所の利益とは、爲く一切有情を勸發して、悉く無上菩提に安住せしめ、終に二乘の法を以て而も得度せしめず。今眞言行人應に知るべし、一切有情は、皆如來藏の性を含じて、皆無上菩提に安住するに堪任せりと。

(講義) 利益とは、菩薩大乘の教益を得せしむるを云ふ。法華經方便品に「諸佛の世に出で玉ふに、唯此一事のみ實なり、餘の二は則ち眞に非ず」と、終に小乘を以つて衆生を濟度せず」とあり、又龍猛菩薩の十住毗婆娑論第五、易行品第九に「若し聲聞地及び辟支佛地に墮すれば、是を菩薩の死と名く、則ち一切の利を失す」とあり、是れ即ち自行自度の小乘二乘の厭ふべく、大乘菩薩行の欣求すべきを示す。次に如來藏とは、佛性の異名にして、五濁雜染の我等の心中に、法身如來の智性を含藏する成分を云ふ。法衡鈔に「藏とは是因性の義當來に於て佛果を現行するより以て其名を彰す。如來の藏如來藏と名く」と云ひ、勝鬘經に「隱を如來藏と名け、顯を名けて法身と爲す」と云ふ。然るに密家の意は聊か異なれり、宥快鈔第四に「又自宗の實義に就かば、六大・四曼・三密の本有の三大を以て、如來藏と意得べし」とあり、即ち此の意を以て解すべし。不律亂行の我等の身中に六大・四曼・三密の德悉く具備して、一も缺くることなし、故に勝妙の良縁に接する時は、本有の性德內に開け、以て現身に無上覺を成するを得ん。

華嚴經に云く、一衆生として眞如智慧を具足せずと云ふことなし、但し妄想顚倒執着を以て、而も證得せず、若し妄想を離んぬれば一切智・自然智・無碍智則ち現前することを得。

(講義) 華嚴經に五種あり、一は秦代の覺賢三藏の所譯、即ち六十卷の華嚴經是なり、二は大唐の日照三藏の所譯、之を八十卷の華嚴經と爲す、三は大周の實叉難陀の譯、是れ亦八十卷あり、四は此譯に對し、更に賢首大師並に日照三藏の補闕せるものあり、之を四十卷の華嚴經と爲す、五は般若三藏の譯、是れ亦四十卷なり。今引く所は實叉難陀(Śikshananda 譯して喜學と云ふ、于闐國の人なり)の譯の八十華嚴經の第五十一卷

の文に略ゞ近し。當論に眞如智慧とあるを彼經には如來の智慧とあり、其の異る所は單に之れのみ。眞如智慧とは、眞如の理と、衆生本有の智慧との理智の二を示す、起信論には、一切衆生、悉有眞如と說て、理の一邊を示し、釋論には一切衆生、皆有本覺と說て、智の一邊を掲ぐ、然るに八十華嚴經は、能具の人たる如來と、所具の智たる智慧とを並べ擧げて、如來智慧と說き、當論は理智の二德を併擧して、眞如智慧と談ず、次に眞言敎の意にて說かば、眞如は前五大の理、智慧は第六第七識等の智なり、此の智と彼の理と、本來法爾として衆生に備在して、金胎兩部の曼茶羅の姿を現ず。異本即身義に「一切衆生の自身の中に、金剛胎藏の曼茶羅は、因果を遠離して法然に具はれり」とあるは此の意なり。初心鈔卷上には、眞如を理佛性と說き、智慧を行佛性と說く。次に妄想とは根本無明を指し、顚倒執着とは、枝末の煩惱を指す。大乘義章第五に「妄想と云ふは、謂ゆる凡夫の實に迷ふ心なり、諸法の相を起し、相を執して名を施し、名に依て相を取り、取る所は不實なり、故に妄想と曰ふ」とあり。次に提婆の心經の註に「性に背くに由るが故に顚倒と名く」と見ゆ、卽ち眞如法性の理に背反するを指して顚倒と名く。執着とは、五蘊假和合の我體、若しくは五蘊其ものを堅執、愛着して、實我實法ありと爲す惑性を云ふ。初心鈔卷上には妄想を根本無明と爲し、顚倒を所知障と說き、執着を煩惱障なりと解す。若し此義に依らば、煩惱障は眞如の理を障へ、所知障は菩提の智を障ふ。此二障あるが爲めに、本有の性德、隱蔽せられて顯現せず。一切智とは、一切萬有を了々に覺知する智慧を指す。此は煩惱の雲晴れて始めて現はるゝ智性なるが故に、一に始覺の智とも云ふ。自然智とは、吾人に生來具有する智慧にして、此智慧あるが爲めに、敢て明師の敎を俟たざるも、自ら是非善惡を識別することを得、所知障の惑を斷する時に現はるゝ智なり、此智は自然に人に具はる智なるが故に、一名無師智とも云ひ、若しくは本覺の智とも云ふ。無碍智とは、根本無明を斷する時に現はるゝ智慧にして、其の運用無碍自在なるが故に此名あり。一說に本覺始覺、二智相融無碍の智とも云ふ。初心鈔卷上に「無碍智とは、上の本覺の智は體なり、始覺の智は用なり、此體用は一味和合して障碍せざるが故に、始覺本覺不二一體なるを無碍智と云ふ」とあるは即ち是なり。

此一段を要約して說けば、凡て有情の萬類は、一として眞如の理と、覺了の智とを有せざるはなく、此理智は佛菩薩の賜に非ず、人天の所作に非ず、法爾自然に我等に具

はれる萬德莊嚴の實質なり、但し我等凡夫は無始の昔より、妄想顚倒執着の惑業の垢深重なるが爲めに、自身の微妙莊嚴の曼荼羅心を開披する能はざるのみ。若し夫れ機根練熟し、如說に修行する時は、何人と雖も、悉く無始の妄雲頓に消散して、本覺圓明の月鮮かに、一切智・自然智・無碍智の三智、即時に妙用を起して、十方法界を照さん、尙ほ三智相互の關係を知らんとせば、宥快鈔第四を參看せよ。

## 三　安樂の意義

言ふ所の安樂とは、謂く行人既に一切衆生は、畢竟して成佛すと知るが故に、敢て輕慢せず、又大悲門の中に於て、尤も宜く極救すべし、衆生の願に隨て而も之を給付せよ、乃至身命をも悋惜せず、其をして安存せしめ、悅樂せしめよ、既に親近し已んなば、師の言を信任せん、其相親まんに因て、亦敎導すべし、衆生愚矇ならば、强て度す可らず、眞言行者、方便引進す可し。

（講義）

安樂とは、大悲拔苦の義にして、眞言行者大悲愍の心を以て、同胞兄弟の苦患を除て、安樂を得せしむるを云ふ。安存とは身命を安穩に存長せしむる意。悅樂は安存に對し、寧ろ心の悅適快樂を指す。衆生愚矇ならばとは、劣鈍の衆生を勸誘する方法を示す。即ち所化の衆生が未だ密乘の何にたるを知らず、知慧頗る劣等なる時には、其知識の程度を計て、其れ相應の敎を施し、知識稍々開くるに及んで、始めて徐ろに密乘に引入すべきを云ふ。

次に此一段の要旨を述ぶれば、謂ゆる安樂とは、衆生の苦惱を除かんとする行者の悲念に名く、金剛薩埵尙ほ龍猛菩薩に告て言く、一切衆生は誰れ一人として佛と成るべき性能を具へざるはなし、隨て早晩は良緣に觸れて成佛すべきものなるが故に、眞言行者たるものは、一向行惡業の薄知底下の輩に對しても、決して輕侮の念を懷き、若しくは傲慢不遜の態度に出づ可らず。又次に眞言行者たるものは、常に大悲愍の念に住して、有緣の輩を拯ふべし。衆生の苦惱を除かんが爲めには、自己の身命をも決して惜む勿れ。昔須陀那王子は、一衆生の願望に依て、妻子珍寶を併せて給付したりと傳ふ。是れ實に衆生愛護の赤誠の流露なり。我が赤誠既に斯の如くなれば、

如何に無情冷酷なる者と雖ども、早晩は我が誠心に動かされて、我れに信近し來らん。去れど衆生愚朦ならば、强て此深妙の法を授くるも却て益なし、故に種々の教化を施して、信根を練熟せしむべし。信根練熟し、善智漸く萠動するに至て、始めて五相三密の祕觀を授くべし。機根未熟、智慧劣狹なる衆生に對して、猥りに此祕法を談すれば、偶々弟子をして怪訝の念を增さしむるのみ。否却て師たるものは、之れが爲めに重罪を招かん。是を以て眞言行者たるもの、大悲門の行を修するに當り、須らく先づ衆生練根の妙術を知らざる可からずと。

金剛薩埵は、弟子の龍猛に對する訓諭既に上述の如し、傳に龍猛菩薩は歸信の王たる引正王(梵に沙多縛訶(Satavāha)王と稱す)の太子の誠願に因て、乾れたる茅草を以て、自ら其頸を刎ね、安如として示寂せりと云ふ(付法傳)。此の傳說の因て起る所、誠に偶然にあらざるなり。

# 第三章　勝義の菩提心

## 第一節　淺略の勝義

### 一、勝義の意義

二に勝義とは、一切の法は、自性無しと觀ず、云何んが自性なきや。

(講義)

勝義とは、如來の三德の中には、智德に當り、行者に付て云へば、善惡優劣を識別する智慧に當る、大日經疏第七に梵に「波羅磨他(Parama-artha)と云ふは、飜して第一義と爲し、或は勝義と云ふ」とあり、又大日經住心品に「諸法は無相なり、爲く虛空の相なりと、是の觀を作し已るを勝義の菩提心と名く」と示す。飜て考ふるに勝義の菩提心の思想は、住心品を以て其根據と爲し、住心品の無相勝義の菩提心の思想は、當論に於て更に詳說せられたり。竊に惟みれば、高祖大師の十住心の御判釋は、其思想を當論に汲み、語句を住心品、並に大日經疏より取り、更に御自身の識見を以て、顯密兩教の淺深次第差別を立てられたるものと想像するに難からず。東密の釋家は、皆悉く勝義の一章をば大師の十住心に配釋して解するを例とす。是れ偏に高祖の當論心讀

の御意に戻らざらんことを恐れてなり。高祖の御意を知らんと欲せば、三摩耶戒序を三五精讀すべし。次に一切の法とは、密教を除き他の凡の教法を悉く攝在す、但し本節に出す所は、十住心の中、第一の住心より、第六の他緣大乘心迄を指す。自性なしとは、確實不變の實體實性なき意。更に下文に至りて自ら明らかなるべし。

## 二、凡夫の狀態

謂く凡夫は名聞利養資生の具に執着して、務むるに安身を以てし、恣に三毒五欲を行す、眞言行人誠に厭棄すべし、誠に棄捨すべし。

（講義）凡夫とは凡鄙なる士夫の意、即ち善因善果、惡因惡果の理法に暗き迷蒙の輩を指し。資生の具とは、衣服飮食、臥具醫藥等、苟も生活を資助するものを悉く指す。三毒とは貪瞋痴の三を云ふ。貪は名利を貪ほり求むる心を指し、瞋は己れの意に適はず心に不滿を懷くを云ひ、痴とは因果應報の理を信せず、放に食色眠の三欲に捕はるるを云ふ。貪瞋痴の三は、吾人の身心を惱害するものなるが故に毒と名く。五欲とは色・聲・香・味・觸の五つを指す、欲は貪求を義と爲す、色とは眼の感覺に映するもの、凡てを指し、聲は耳覺を觸發するもの云ひ、香は鼻覺に對するもの、觸は觸覺に對するものを云ふ。中に於て五欲の所對となるものは、凡て五種の感覺を喜ばしむるものを指す。法華經第一に「五欲に堅着して痴愛の故に惱を生じ、諸欲の因緣を以て、三惡道に墜墮し、六趣の中に輪廻して、備に諸苦の毒を受く」と云ひ、諸經要集第十二に「涅槃經に云く、凡夫の人は、五欲に縛せられて、魔波旬をして自在に將ゐ去らしめ、彼獵師の獼猿を獲、捕へ擔負して家に歸るが如しと、五欲とは男女の心上の色聲香味觸等是なり」とあり。五欲は吾人の注意を外部に向はしむるものなり、然るに佛教の修行は内觀を主とするものなるが故に、五欲に愛着するを深く厭ふを常とす。

此一段の意は謂く、凡夫は名聞利養、資助生活の具に愛着し、孜々として一心の安穩を計り、嘗て殊勝最上の妙法あるを知らず、日夕に營々として衣食名利の獄屋に繫がれ、恣に貪等の三毒、色聲等の五欲を求め、常に身心を惱害して止まず、眞言行者たるもの、誠に彼等の所行を厭ふべし、彼等の希求する名聞利養を棄却すべし、斯の如

きは、眞實常住の道にあらず、彼等凡夫は、五欲に縛せられて、六趣三界に跉跰し、未來永刧、常樂の佛國を開見する能はず、決して凡夫の所行に習ふ可からず。

## 三、外道の厭ふべきこと

又諸の外道は、其身命を戀て、或は助くるに藥物を以てして、仙宮の住壽を得、或復天に生ずるを究竟と以爲へり、眞言行人、彼等を觀ずべし、業力若し盡きぬれば、未だ三界を離れず、煩惱尙ほ存し、宿殃未だ殄びず、惡念旋起す、彼時に當て苦海に沈淪して、出離すべきこと難し、當に知るべし、外道の法は、幻夢陽焰に同じきなり。

（講義）

外道とは、佛敎を內道と稱するに對して、凡て佛敎に非ざるものを外道と云ふ。三論玄義に「至妙虛通、之を目けて道と爲し、心道外に遊ぶ故に外道と名く」と說き、又大日經疏第十九に「邪見の心を以て、理外の道を行するが故に、亦は外道と名く」と說く、是れ佛敎を以て正道と爲すに對して、他を悉く邪道又は外道と爲す說なり。藥物とは神丹練丹等の藥中の靈物を指す、之を服餌すれば久しからずして仙人と成りて、壽命長遠なることを得（抱朴子を見よ）。仙宮とは、仙人の住處、釋名に「老て死せざるを仙と曰ふ」とあり、寶鑰に「上は非想に生じ、下は仙宮に住して、身量四萬由旬、壽命八萬刧にして、下界を厭ふこと瘡痍の如く、人間を見ること蜉蝣の如し、光明は日月を蔽し、福報は輪王に超たり」と見ゆ。天に生ずると云へる天とは、非想天と非々想天とを、指す。外道は此等の天を以て涅槃究竟の處と爲す、而も佛敎より見れば、尙ほ未だ生死の迷衢を離れざる境界なり。業力とは、六行四禪等の有漏業、並に仙藥の効力等を指す。未だ三界を離れずとは、外道は藥力等の外緣を待て、天上の仙宮に生を受くると雖ども、尙ほ自心に於て無漏の智慧を發得せず、故に業力若し盡きぬれば、恰も虛空に射たる矢の力盡きて落下するが如く、再び三界に沒在して、六趣に頭出頭沒せん。次に煩惱尙ほ存すとは、外道の果を得たる者は、現に惑業なしと雖ども、隨眠煩惱尙ほ殘存することを意味す。外道は苦麁障淨妙離の六行に依りて、一分煩惱の現行を制伏し得可しと雖ども、本と是れ有漏智の所行にして、未だ諸法源極の理に通徹

せず、故に爾か云ふ。旋起とは旋は還の意にして還て復び起る義なり。宿殃とは昔の災殃の意にして、曾て作りし罪を指す。苦海とは、別して三惡趣を指し、通しては三界を意味す。外道の法云云とは、外道の法教の無自性なる旨を明す。心地觀經第一に「非想の諸天は、八萬劫なれども、福盡て諸の惡道に還歸す、猶夢幻と泡影との如く、亦朝露と電光との如し」とあり、即ち此意なり。

## 四、二乘法は至極に非ず

又二乘の人、聲聞は四諦の法を執し、緣覺は十二因緣を執す、四大五陰畢竟磨滅すと知て、深く厭離を起し、衆生執を破し、本法を勤修して其果を剋證す、本涅槃に趣くを究竟と已爲へり。眞言行人、當に觀ずべし、二乘の人は、人執を破すと雖ども、猶ほ法執あり、但し意識を淨めて、其他を知らず、久々に果位を成し、灰身滅智を以て、其涅槃に趣くこと、大虛空の湛然常寂なるが如し。定性ある者は、發生すべきこと難し、必ず劫限等の滿を待て、方に乃ち發生す。

（講義）

聲聞とは梵に舍羅婆迦(Srâvaka)と云ひ、佛在世に出て、佛の說法の音聲を聞て證悟する人を云ふ。四諦とは具には四聖諦(Catur-ârya-satya)と云ふ、諦とは眞實性の義なり。謂ゆる四聖諦とは、一に苦(Dukha)とは逼惱を義と爲し、二に集(Samdaya)とは召集を義となし、三に滅(Nirodha)とは滅無を義と爲し、四に道(Mârya)とは、能通を義と爲す、此四は世間出世間の眞實義諦を表するものなるが故に、四諦と名く、四諦は有漏の因果を明す、苦集の二は有漏の因果を示し、滅道の二は無漏の因果を表す。苦は有漏の果にして、集は有漏の因、又滅は無漏の果にして、道は無漏の因なり。斯の如く果因の次第に說きたるは、果は顯はにして知れ易く、因は隱祕にして知れ難きが故に、先づ其知れ易きものより示さんが爲めに、果因の次第にて說くなり。

緣覺とは梵に辟支佛陀(Prati-eka-buddha)と云ひ、舊譯に緣覺、新譯に獨覺と云ふ、飛花落葉の外緣に誘はれて、十二因緣を觀して、諸法の實相を覺知するが故に、緣覺と名け、無佛世に唯獨り出でて、諸法無常の理を覺るが故に、獨覺と名く。法死義林章第二

に「獨覺藏とは、法華經に說く、若し衆生有て、佛世尊より法を聞て信受し、慇懃に精進して、自然慧を求め、獨り善寂を樂んで、深く諸法の因緣を知る、是を辟支佛乘と名く、瑜伽論に云く、常に寂靜を樂て、雜居せんことを欲せず、加行を修し滿じ、師友の敎無ふして、自然に獨り覺て、永く世間を出づ、故に獨覺と名く」とあり、尙ほ俱舍の頌疏には部行と麟喩との二種の獨覺を說く。十二因緣とは生死輪廻の因果を示す、十二因緣(Nidāna)とは無明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老死已上是れなり、一に無明(Avidyā)とは過去の生に於て起す所の煩惱を云ひ、二に行(Saṃskāra)とは一に業と名け、身三口四の七支の惡業を指す、行とは造作の義、業因は能く當來の果報を造るが故に行と云ふ、三に識(Vijñāna)とは、過去の業力に因て、現在の果を感じて、最初に母胎に宿るを識と云ふ、四に名識(Nāma-rūpa)とは、入胎の識支の第二剎那以後を云ふ、謂ゆる名色とは、色心の五蘊を指す、心法は色形なく、但名のみあるが故に名と云ひ、色とは色法にして體內の五位の次第に名く、五に六入(Sadāyatana)とは眼耳鼻等の六根を指す、六入を又は六處とも名く、六に觸(Spars'a)とは、根境識の三、相和合するを云ふ、即ち苦樂捨の三種の境に於て、相接觸する位なり、此は出胎後二三歲の時の狀態を指す、上に示す識・名色・六入の三は胎內の位に存す、七に受(Vedanā)とは、色聲香等の六塵を受納するを云ふ、八に愛(Tṛṣṇā)とは、所緣の境に對して、愛好の情を生ずるを意味す、七歲巳去花を愛し、菓實を貪るが如き即ち是れなり、九に取(Upādana)とは、貪得を義と爲す、十五歲己去、愛心轉た强く、其所貪に隨て追求して之れを取り、四方に探り求めて敢て勞倦を辭せざるもの是れなり、十に有(Bhāva)とは、當果を有ならしむる勢力を云ふ、意は取着に依るが故に、作業を起し、作業を起すが故に、當來の果を引く、當來の果體を招く力を有と名く、十一に生(Jāti)とは、當來の果體を招きたる位を云ふ、十二に老死(Jarama-vana)とは、一期の壽命將に終らんとするを云ふ。十二因緣は、煩惱業苦の三道を開說したるものに外ならず、惑業苦の三道を細說すれば十二因緣となる。十二因緣に三世兩重と、二世一重とあり、二世一重は法相大乘の說、三世兩重は俱舍等の說なり。四大五陰とは、諸の現象界の原理なり。四大とは地水火風、五陰とは色受想行識是れなり、四大は五陰の中の色陰を細說したるものに外ならず、四大に假實の二種の不同あり、假の四大とは、吾人の五官に依りて感識し得るものを云ひ、實の四大とは、堅濕煖動の四性にして、是れ抽象的の觀念なり。次に五陰(Skandhas)とは、

舊譯の語にして、又は五衆とも云ひ、新譯に五蘊と飜す、五陰の陰は陰覆の義にして、即ち是れ淸淨法身を陰覆する意なり、五陰は色心二法の中に於て、心法に迷ふ者の爲めに說く、故に有ゆる有形の事物を合して色法の一とし、無形の精神活動を開て、受想行識の四陰となすなり。次に衆生執とは、人執品の惑を云ふ、此衆生執を破するを、人空の理を證すと云ひ、又は生空觀を得とも云ふ。人我の體は、本と四大五陰が、假りに聚りて和合せる位に名けたるものなり。凡夫は此理を知らずして、猥りに實我實法ありと執着して、種々の苦惱を招く、然るに今二乘の人は、四諦十二因緣の觀を修して、從來我なり人なり、と執着したる我人の體は、四大五陰假和合の姿なりと知て、無始以來の人執の惑を斷して、人空の理を證するなり。本法とは、聲聞の四諦、緣覺の十二因緣等其乘の人の本來修すべき法敎即ち是れなり。其果とは聲聞の四果、緣覺の一果を指す、聲聞の四果とは、一に須陀洹果 (Srotāpanna) 譯して預流果と云ひ、二に斯陀含果 (Sakridāgāmin) 譯して一來果と云ひ、三に阿那含果 (Anagamin) 譯して不還果と云ひ、四に阿羅漢果 (Arhan) 譯して無學果と云ふ、已上是れなり。緣覺の一果を亦阿羅漢果と名く。尅證とは尅は能なり、勝なり、即ち能く其果を證悟するの意なり。本

阿羅漢果と本涅槃とは本法を勤修して得る涅槃を云ふ、涅槃(Nirvāna)は婆娑論に出趣又は永離稠林等四種の飜名を出す、大乘敎は圓寂の譯名を用ふ。法執ありとは、二乘の人、以爲らく、四大五陰の法は實に存在し、之あるが爲めに、我人は生死の苦海に沈淪せざる可らず、由是四大五陰は苦根にして厭ふべきものなりと爲し、之れに反して涅槃は常住眞實の法なり、是れ欣求すべきものなりと爲す、此の如く四大五陰を厭ひ、涅槃寂靜の法を願ふは是れ法執あるが爲めなり、以是、人執を破すと雖ども猶ほ法執ありと說く。但し意識を淨めて云云とは、小乘は眼耳鼻舌身意の六識のみを說て、七八等の餘識を立てず、隨て斷惑に於ても六識相應の煩惱障を斷するのみにして、七八二識相應の惑を斷せず、七八二識に法執品の惑あり、第六意識には人法二執の惑あり、然るに二乘の人は此人法二執の中の人執品の惑を斷するも未だ法執品の惑を斷せず、況んや七八所屬の法執品の惑に於てをや、故に但し意識を淨めて其他を知らずと云へり。久々に果位を成すとは、二乘の人は自乘の果を證するに、聲聞は三生六十劫、緣覺は四生百劫を要す、智度論第二十八に「辟支佛有て、第一に疾き者は四世に行し、久しき者は乃至百劫に行す、聲聞の如きは疾き者は三世、久しき

者は六十劫なり」とあり、光法師の釋に「三生六十劫は相續修に據る、若し間斷あれば無始無終なり」とあり、之を眞言行者の一生頓悟の成佛に比すれば實に長時なりと言はざる可らず、故に久々に果位を成すと云ふ。灰身滅智とは無餘涅槃を云ふ、此涅槃に入れば身分を灰燼とし、心智を滅却して毫も餘す所なし、故に爾か云ふ。定性ある者云云とは、二乘定性の人の成佛の難きを示す。劫限等の滿を待つとは、聲聞の四果中預流は八萬劫、一來果は六萬劫、不還果は四萬劫、阿羅漢果は二萬劫、緣覺の阿羅漢果は十千劫を經過して始めて廻心向大す、之を指して劫限等の滿を待てと云ふ。

若し不定性の者なれば、劫限を論ずることなく、緣に遇へば便ち廻心向大す、化城より起て三界を超えたりと以爲へり、謂く宿し佛を信ぜしが故に、乃ち諸佛菩薩の加持力を蒙て、而も方便を以て遂に大心を發し、乃し初め十信より下遍く諸位を歷て、三無數劫を經、難行苦行して、然して成佛することを得、既に知んぬ、聲聞緣覺は智慧狹劣なり、亦樂ふ可らず。

【講義】

劫限を論ずることなしとは、聲緣二乘の不定種性の人は、八六等の時分を滿せずして、外緣に會せば、悉に小乘の小心を捨てて、大乘の敎法に歸入して、苦修練行するを云ふ。緣に遇へばとは、善友若しくは善知識等の敎導に接するを云ふ、下文に蒙諸佛菩薩加持力とあるは即ち是れなり。廻心向大とは、小乘涅槃に趣向する心を轉廻して大乘佛果に趣向するを云ふ。化城とは二乘の極果たる有餘無餘の涅槃を指す、二乘の極果たる涅槃を化城に例するは、法華經の化城喩品に出づ。超三界とは界外の生を受くるを云ふ。宿しとは、今界外にありて前生の界内にありし時を指す。加持力とは今は諸佛菩薩の驚覺開示を云ふ。二乘の人が涅槃常寂の夢路を辿る時に、宿善開發して遍虛空の諸佛諸薩埵に彈指驚覺せらる、此時恰も夢の覺めたらんが如き心致して、已れに還れば、既に三界の生死を離脫して、無相空寂の三昧に耽りしを悟ると同時に、佛果の寶城は尙ほ遙遠の彼方にあるを知る。方便を以て遂に大心を發すとは、諸佛菩薩の善巧方便力に薰陶されて、二乘の人遂に菩薩大乘の心を發起するを云ふ。初め十信より下遍く諸位を歷てとは、二乘の人大乘菩薩の心を發起し、菩薩修行の初位十信より始めて、乃し十地等覺の五十二位を經るを指す。三無數劫

を經てとは、二乘の人が廻心後に修行する間の時間を明す、無數とは梵に阿僧祇(Asamkyā)と云ひ、劫とは具には劫跛(Kalpa)と云ひ、時分と譯す。菩薩は十信三賢位(三賢位とは十住十行十回向の三十位を指す)に人執品の惑を斷する間に初阿僧祇劫を經、次に十地の中に於て、初地より七地に至るまでに、法執品の惑を斷する間に、第二阿僧祇劫を經、又次に十地の中の第八地より第十地に至る迄に、無明品の惑を斷盡する間に、第三阿僧祇劫を經ると云ふ。次に阿僧祇劫の時間の量は本業瓔珞經卷下に「大石の方八百里なるあり。淨居天の衣(重さ三朱なりと云ふ)をもて、三年(彼の天界の日數にて云ふ、此娑婆の三年よりは遙に長し)に一度拂ひ、此石を拂盡すが如きを一阿僧祇劫と名く」とあり。智慧狹劣とは、二乘の人の智慧の淺劣なるを指す、彼等は人執品の惑の斷すべきを知りて、未だ法執品並に無明品の惑あるを知らず、且つ自個の得道にのみ專注して、他を利する念に乏しきが故に爾か云ふ。

一段の大意を述ぶれば、若し夫れ不定種性の二乘なれば、有餘無餘兩涅槃の何れに於ても、小乘の小智を轉捨して大乘菩薩の行に進み入ることあり、是れ內は以て自己心內の本佛に薰動せられ、外は以て善知識の芳訓に浴するが爲めなり、法華化城喩品の意に依れば、今五百由旬の寶城に至らんとするに、體力微弱なる者に取りては、其は甚だ遙遠に過ぐるが故に、導師方便力を以て、三百由旬の所に化城を現出し、暫時休憩せしめ、其元氣恢復するを見て、更に彼等を策勵して二百由旬の眞の寶城に導びけり、是れ二乘の人を大乘に引入するを意味す、小乘の人は斯の如き善方便に誘はれて、小乘涅槃の夢覺め、心想還生して蘇生の思あり、此時初めて三界の火宅を超越せるを知る、是れより以後菩薩五十二位の中の十信の初位に入り、三賢位十地を經て、佛果の寶城に到達する迄に、三大阿僧祇劫の間、六度萬行を修し、難行苦行の末に始めて成佛することを得、由是之を觀るに聲聞緣覺は智慧狹量にして、自度を專らとし、寂靜涅槃に入るを以て最上の志願と爲す、其涅槃たるや人空の理を證するも、未だ法空の理を解せず、其目的とする所、既に至極にあらず、既に至極ならざるが故に、是れ方便假立の施設なり、方便假立なるが故に、二乘の法敎は、亦是れ無自性なり、眞言行者決して此法を樂求す可らず。

## 五、大乘法も尙ほ樂ふに足らず

又衆生有て大乘の心を發して菩薩の行を行し、諸の法門に於て遍修せざることなし、復三阿僧祇劫を經て、六度萬行を修し、皆悉く具足して然して佛果を證す、久遠にして成することは、斯れ所習の法敎に致次第あるに由てなり、今眞言行人前の如く觀じ已るべし。

（講義）

致次第ありとは、五位次第、三祇の階級、凡聖因果等の次第を指す、菩薩大乘の人の修習する法敎は、本と次第行布の說なるが故に、能行の人も隨て遠劫作佛する旨を明す、述記に「所求の大乘は福智無邊なり、少しく修行し速に圓に證するに非す、必ず須らく三劫に無邊の緣を修すべし」とあり、即ち此意なり、前の如くとは、二乘を明す段の廻心已後の文を指す、二乘の廻心以後の行相と、大乘の今明す行相とは、漸悟直往の異りありと雖ども、而も之を秘密一乘敎に比すれば、智慧淺陋にして樂求するに足らす。

一段の意は、又次に菩薩種性の衆生有て、直に大乘の心を發起し、菩薩所修の六度の行を行じ、諸の法門に於て遍學兼修せざることなし、三大無數劫の間に、六度萬行を具足して佛果を證成す、斯の如く久々遠々に佛果を成するは、是れ其學習する法敎及び其所詮の義理に、次第淺深の不同あるが爲めなり。菩薩大乘の法敎、是れ速疾頓成にあらず、亦無上最勝にあらず、眞言行人欣求す可らず。

## 六、　眞言行者は二乘並に菩薩に超越す

復た無餘の衆生界の一切衆生を利益し安樂する心を發すものは、大悲決定するを以て、永く外道二乘の境界を超ゆ、復瑜伽勝上の法を修する人は、能く凡より佛位に入る者なり、亦十地の菩薩の境界を超ゆ。

（講義）

瑜伽勝上の法とは、眞言行者所修の法敎を指す、瑜珈（yoga）とは、相應の義、相應とは、因果相應、理智相應、生佛相應等あり、即ち入我々入の秘觀に依りて、生佛不二一實の理を體現するを相應の義と爲す。實抄に「眞言行者三密の修行を作す時に、有漏の三

業を動せずして、能く三業をして本尊に同せしむ、此一門より法界に入ることを得るなり、所詮相應とは、不二の異名なり、此宗は不二を以て宗と爲す、此宗をば大日經には瑜珈宗と名け、亦陀羅尼宗と號し、釋論に不二宗と號するなり」とあり、謂ゆる瑜珈勝上の法とは、下の三摩地の章に出す所の五相三密の妙觀を指すなり。凡より佛位に入るとは、一生成佛、若しくは即身成佛の旨を明す。十地の菩薩とは眞言行者は顯敎の十地の菩薩に勝出せる旨を明す、若し夫れ自宗の十地の菩薩なれば、初地の菩薩なりと雖ども、既に是れ自證圓滿の人なるが故に、今は顯乘の十地の菩薩を眞言行者に臨めて爾云ふ。

一段の意は謂く、眞言行者たるものは、初發心時に、行願の菩提心を起すが故に、無餘の有情に對して利益し安樂せしめんと志し、大慈悲心既に堅固不動なるが故に、遙に外道二乘に超出す、復次に三密瑜伽の勝上の法を修する人は、大日如來の加被力に依りて、凡夫の位より直に佛陀の極位に進昇するが故に、大乘菩薩の十地の位を超越するなり。

## 第二節 深秘の勝義

### 一、大意

又深く一切の法は自性なしと知る、云何んが自性なき、前には相說を以てし、今は旨陳を以てす。

（講義）

自性なしとは、萬有の原理に固定せる相なきを云ふ、實大乘の意に依れば、眞如は常に自性を守らずして、緣に觸れて萬化の姿を現作すと云ふ、即ち此意なり。旨陳とは、諸法の眞實の旨を陳ぶる意、菩提心論抄第八に「當段所明の無自性の大綱は、初に煩惱業苦の三道に付て無自性の義を明す、意は一念無明の心より下轉成妄して六趣に輪廻すと雖ども、覺悟する時は、種々の法滅するが故に、自性なき義を明し、後には諸佛の從眞起用の設敎に付て、無自性の義を明す、意は如來隨機の敎法は心源に至る時は之を捨つべきが故に、又自性なき義を明す、是の如く染淨の諸法に、却て法體の無自性の義を明すは、是れ旨陳の大綱なり」とあり、旨陳の義は蓋し之れに外な

らず。

## 二、迷界の諸現象

夫れ迷途の法は妄想より生ず、乃至展轉して無量無邊の煩惱を成して六趣に輪廻す、若し覺悟し已んぬれば妄想止除して、種々の法滅するが故に、自性なし。

（講義）途とは眞如の寶城に到達すべき正道なり、此正道に迷ふを迷途と云ふ。展轉とは展開轉生の意にして一根本無明より枝末の煩惱の續々派生するを云ふ。釋論に「譬へば種子は唯一なれども、無量無邊の華果枝葉等の一切の類を生出するが如く、根本無明も亦復是の如し、唯一の無明能く一切の無量無邊の煩惱染法を生す」とあり、某人師の釋に「一翳眼に在れば千華空に亂る、一妄心に在れば恆沙の生滅あり」と云へるは、一根本無明より數多の煩惱を派生することを表す。六趣とは地獄餓鬼等の六道を指す。心地觀經第三に「有情の輪廻して六趣に生すること、猶し車輪の始終な



きが如し」とあり、之れに依り、輪廻は無始終の意なるを知る、而して衆生輪廻の相を觀るは菩薩の知見に依る、大智度第十六に「菩薩は天眼を得て、衆生の五道に輪廻するを觀る云々」とあるに徴して明かなり。妄想止除して種々の法滅すとは、根本煩惱先づ止み、次て枝末の煩惱の自ら滅盡する意を表す、十住心論第九に「心源を悟るが故に、一大の水、澄淨なり」と云ひ、起信論に「一切の法は鏡中の像の體として得べきことなきが如く、唯心の虚妄なり、心生すれば則ち種々の法生し、心滅すれば種々の法滅するが故に」と説く、是れ妄心去れば心外の諸現象自ら滅却する意を示す。

一段の意は、我等凡夫は、自心の本際に至るべき途道に迷亂し、由是種々の幻象現はれ出て、乃至念々に展轉動起して無量無邊の煩惱妄想を作爲し、斯くして自心より地獄餓鬼等の六道の迷衢を變現し、終始止むことなきこと、恰も車輪の日夜に轉廻して窮極なきが如し、若し夫れ心佛內に動き、良緣外に催ふすれば、眞如の覺月、忽爾に現前し、妄去り眞來れば、根本無明は自心本具の金剛薩埵と變し、枝末の種々の煩惱は、三世諸佛の化現と轉せん、旣に此に至れば迷界の差別の諸現象は、本來無自性なるを知るに至らむ。

## 三、諸佛慈光の發現

復次に諸佛の慈悲は、眞より用を起して衆生を救攝し玉ふ、病に應じて藥を與へ、諸の法門を施し、其の煩惱に隨て、迷津を對治す、栰に遇ふて彼岸に達しぬれば、法已に捨つべし、自性なきが故に、大毘盧遮那成佛經に云ふが如し、諸法は無相なり、爲く虛空の相なりと、是の觀を作し已るを勝義の菩提心と名く。

（講義）

諸佛の慈悲云云とは、如來の清淨法も本と因緣より生じ、其實確固不動の自性なきことを示す。眞とは眞如若しく法身を云ひ、用とは眞如の智光若しくは法身の慈悲の外用を指す。病に應じて藥を與ふとは、病に數多あるが故に、隨て又藥に多種あるが如く、衆生の心病に八萬四千の煩惱あるが故に、能退治の法敎にも自ら八萬四千の別あり、智度論第十九に「譬へば藥師の一藥を以て衆病を治することを得ず、衆病同しからざれば、藥も亦一ならざるが如く、佛も亦是の如し、衆生の心病に隨て種々に衆藥を以て之を治し玉ふ」と說き、又三昧耶戒序に「一千二百の藥草、七十二種の金丹は、身病を悲んで而も方を作り、一千二百の妙法、八萬四千の經數は、心病を哀んで而も訓を垂る、身病百種なれば、則ち方藥一途なること能はず、心疾萬品なれば則ち經敎一種なることを得ず」と云へり、經敎既に衆生の心病に應じて生したるものとすれば、衆生の迷妄の無自性なると同時に、諸佛の法敎も亦隨て無自性ならざる可らず。津とは船舶の集る所を云ふ、是れ生死の苦輪海を渡るべき救世の船の聚る所にして、即ち菩提涅槃の彼岸を指す、此津に迷ふを迷津と云ふ、迷津とは無明即ち是れなり。栰とは生死の此岸より涅槃の彼岸に運載する法乘にして、即ち八萬四千の法敎を指す、涅槃經に「戒定慧解脫解脫の知見と、六波羅蜜三十七品とを修して、以て船筏と爲し、此栰に乘して煩惱の河を渡り、彼岸の常藥我常に至る」とあるは是意なり。法已に捨つべしとは如來の清淨法輪の無自性を示す、佛の慈悲より出生せる法敎は、衆生の煩惱を退治せんが爲めなり、衆生既に佛果に至れば、彼法敎も隨て無用なり、既に無用なれば捨つるも何の惜む所かあらん。金剛般若經に「我が說法は筏喩の如しと知る者は、法尙ほ應に捨つべし、何に況んや非法をや」とあり、是れ佛の敎

法の無自性を明す。無相とは相として執着すべきもののなきを意味す。虛空の相とは、空間の無相空寂にして一塵を止めざる所は、恰も法性眞如が萬象を離れて獨立して存在して、妙用無窮、自在虛通なるが如し。若し夫れ眞言宗意に依らば、虛空の相とは、無相の菩提心に喩ふ。大日經疏第一に「是の如くの淨菩提心は諸觀を出過して衆相を離れたるを以つての故に、一切の法に於て罣碍なきを得たり、譬へは虛空の相は亦無相なるが故に、萬像皆悉く空に依れども、空は所依なきが如く、是の如く萬法は皆な淨心に依れども、淨心は適に所依なし、即ち此諸法も亦復菩提の相の如し、謂ゆる淨虛空の相なり」と說く。是の觀とは相說と旨陳との二種の無自性の觀を指す、此觀を成し已て無染無着、淸淨虛徹にして心鏡寂照なるを勝義の菩提心と名く。

一段の意は、應化佛及び他受用身の法敎は、本眞如法の差別智用にして、下は人天より、上は顯の一乘に攝取せらるべき種々の衆生を救ふは、名醫の衆病に應じて諸藥を施すが如し、衆生の機根に類同して諸の法門を施設し、其衆病に應じて迷妄を對治し、問津を指南す、人大河を渡るに際し、旣に彼岸に到達する時は、船栰の必要なきに至らん、如來の法敎も生死の大海を渡る船栰にして、彼岸に達すれば法敎隨て用なし、故に法界涯に於て一法として執着すべき常住眞實の法あることなし、大日經第一に「一切諸法は、本來淸淨にして着相を離るるが故に、無相なり、猶ほし太虛空の湛然澄淨にして一塵の相を止めざるが如し」とあり、是の觀に依りて染淨の諸法を悉く空じ去りて、心界に一塵の妄念を止めざるを勝義の菩提心と名く。換言すれば勝義の菩提心とは、眞言行者の阿字無相の心源を、且く顯敎所表の心品に寄せて、次第淺深の差別を開き、其差別を動せずして、阿字本不生の一元に歸會するを云ふ。是れ實に眞言行者の始終の要觀なりとす、出生義に就萬有而照大空とあるは、即ち是れ勝義の眞意を示すものなり。

## 四、一切法無自性

當に知るべし一切の法は空なり、已に法の本無生を悟んぬれば、心體自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失なからしむ、妄心若し起らば、知て而も隨ふこと勿れ、妄若し息む時は、心源空寂なり、萬德斯に具し、妙用無窮なり、所の以に十

方の諸佛、勝義行願を以て、戒と爲す、但し此心を具するは、者能く法輪を轉して、自他倶に利す。

（講義）

一切法空とは萬有の無自性なるを示す、法の本無生とは、萬有の不生不滅の理を云ふ。心體自如にして身心を見すとは、色心は一如同體にして二法別なきを示す、即ち是れ色心一體にして色の外に心なく、心の外に更に色なく、色心不二平等にして、皆な是れ毘盧遮那の平等智身なるを示す。寂滅とは身心の別なく、究覚して是れ無相なるを云ひ、平等とは身心一味平等なる意なり。妄心若し起らば云云とは、行者觀心の用心を說く、眞妄の關係は眞言行者の殊に注意すべき點にして、妄の外に眞を立てず、眞の外に妄の所起を說かず、是れ當相即道の妙秘の潛む所なり、故に五秘密儀軌、並に理趣釋經には、慾觸愛慢の衆生の性慾を提げ來りて、直に金剛薩埵の心德と爲し、薩埵の加持護念の力に依りて、衆生の性慾は轉して、果位の四無量心と化す、凡夫の惑業に即して佛界の淨德を開くは、是れ密家特有の妙觀なり、鑁上人の障子文に「萬法は一心の作なり、心常に佛の境に遊はば、身何ぞ迷界に住せん」と、密家の正觀蓋し此れに外ならず。萬德斯に具して妙用無窮なりとは、妄盡き體露はるる所に、化他の妙業湧起するを示す。此心とは勝義心の智と、行願心の悲との二心を指す。即ち是れ衆生心地の清淨心にして、果位に付て云へば、悲智の二用相融會し、心德の靈用を發揮して、圓轉自在なるを云ふ。

此一段は上に示す「迷界の諸現象」と並に「諸佛の起用」との二段を結ぶものにして、其意を概說すれば、眞言行者たるもの須らく、染淨一切の諸法は、皆自心の妄念より現前し來るものにして、固より實性實體あることなし、と觀ずべし。旣に萬有の諸現象は、皆な是れ自心妄念の現はれなりと悟了すれば、自心に一塵の妄念を止めず、於是乎、自心は法性眞如と融會不二となり、身心の差別を泯亡し、行者此に寂滅無相の眞智に安住して退失することなかん。然るに妄若し來る時には、八不の利劔を振ひ、若しくは四不生の觀を爲し、悉く除去して、決して其を隨逐せしむる勿れ。阿字本不生の月輪に住して、念々阿字の實義に遊意せば、自ら心頭空寂にして澄淨無碍なり。此無染無着の至極の境に達して、始めて無我の大我を發得し、化他の悲念油然として湧き、五智三十七智の德、自ら具足し、大智四德の妙用顯現して、圓轉無窮なり。其の依

て來る所を探ぐれば、皆な大悲の行願と、大智の勝義との二種の菩提心に淵源せざるはなし。此の故に十方三世の諸佛諸薩埵が、勝義と行願とを固く持し玉へるは、其理全く此に基く。

## 五、悲智は如來の本質

華嚴經に云く、悲を先とし、慧を主として、方便共に相應して、信解清淨の心、如來無量の力あり。無碍智現前し、自悟にして他に由らず、具足して、如來に同して、此最勝の心を發す。佛子始めて是の如くの妙寶の心を發生すれば、則ち凡夫の位を超て、佛の所行の處に入り、如來の家に生在し、種族に瑕玷なく、佛と共に平等なり。決して無上覺を成すべし、纔に是の如くの心を生ずれば、即ち初地に入ることを得、心樂動す可らざること、譬へば大山王の如し。

**(講義)** 華嚴經は實叉難陀譯の八十華嚴經第三十四卷の十地品の偈に當る。但し今の文と、彼偈と校合するに、三字の不同あり、今は繁を恐れて略す。是れ行願と勝義との二種の菩提心を證せんが爲に引く。方便とは化他の善巧方便に當る。信解清淨の心とは、十地の菩薩の地々の心品を指す。無量の力とは、慈悲喜捨の四無量心を云ふ。秘藏記を見よ。無碍智とは、眞俗無碍自在なる智用を指す。此最勝の心とは、上の信解清淨の心を表す。凡位とは、十信十住十行十廻向の四十位を指す。此位は迷蒙の凡夫を去ること既に遠しと雖ども、尚ほ未だ眞如法性の何たるを知らず、故に凡位と名く。佛の所行の處とは、十地の地々の聖位を云ふ。如來の家とは、十地を指す。十地の位に入れば、菩薩決定して佛果を證成するが故に爾云ふ。瑕玷(ケテン)とはキズの意。所生の十地の位は、佛家にして諸德相好圓滿するを意味す。無上覺とは、第十一地の等覺の位を指す。大山王とは、須彌山を指す、具には須迷盧(Sumeru)と云ひ、是れ妙高の義なり。俱舍論第十一に「金輪の上に於て九の大山あり、妙高山は中に處して而も住せり、餘の八は周匝して妙高山を遶れり」とあるは即ち是れなり。今は此妙高山が四相の爲めに動搖せられざるが如く、十地の菩薩の信解清淨の心、堅固不動にして內魔外障の爲めに、猥りに動轉せざるに喩ふ。

經の意は、菩薩は大悲を以て修行の首めとし、加ふるに智慧を以て、大悲を成する增上緣と爲し、且つ化他の善巧方便之れに伴ひ、於是乎、信解清淨の心、如來無量の神力、併せて衆生攝化の無碍神變の智用現はれ來りて、如來と等同なるに至る。斯の如く等の諸德は、一も初發淨菩提心の德より流出せざるはなし。佛子此の如くの勝義行願の妙寶の心を發生すれば、十信三賢の凡位を超越して、速に十地の聖位に入り、程なく第十一地の等覺の身を證成することを得べし。旣に十地の位に入れば、所生の種族、殊勝にして諸德圓滿せること、佛と異なるなきなり。故に此境に達すれば、行者決定して佛果を成滿するを得べし。

又華嚴經に云ふに准せば、初地より乃し十地に至る迄、地々の中に於て、皆大悲を以て主と爲すと。無量壽觀經に云ふが如くんば、佛心とは大慈悲是れなりと、又涅槃經に云く、南無純陀、身は人身なりと雖ども、心は佛心に同じ。又云く世間を憐愍し玉ふ大醫王の身、及び智慧倶に寂靜なり、無我法の中に眞我あり、是の故に無上尊を敬禮す。發心畢竟二つ別なることなし、是の如くの二心は、先心を難しとす、自ら未だ度を得ずして、先づ他を度す、是故に我れ初發心を拜す、初發已に人天の師と爲て、聲聞及び緣覺に勝出せり。是如くの發心は、三界を過えたり、是故に最無上と名くることを得るなり。大毘盧遮那經に云ふが如し、菩提を因と爲し、大悲を根と爲し、方便を究竟と爲すと。

（講義）

華嚴經の引文は新舊兩譯の意を取て說きたるものにして、經の全文にあらず、殊に唐譯の十地品の三十四より三十八に渡りて今の文意見ゆ。無量壽觀經は、淨土の三部經の隨一たる觀無量壽經と同本なり。涅槃經は曇無讖譯の第二純陀品に當る。是れ大衆が純陀(Cunda)の佛を供養するを讃嘆せる文なり。南無(Namo)とは、救我・歸命・屈膝等の意ありて尊敬の稱なり。涅槃經第二に「拘尸那城(Kusinārā)の工巧(細工人)の子を名けて純陀と曰ふ、又云く、純陀と云ふは、解妙義と名く」と見ゆ。心は佛心に同とは二意あり、嘉祥大師の涅槃經疏第二に「一には純陀供を献ずるも、亦是れ一切衆生の爲めなり、如來供を受くるも、亦一切衆生の爲めなり、故に心如佛心と云ひ、二には

如來供を受く、此れは是れ受けずして而も受く、受くと雖ども、實には所受なし、純陀供を献ずるも、亦是れ施さずして而も施す、施すと雖ども、實には所捨なし、此心既に同じ、故に心如佛心と云ふ」とあり。又云くとは曇無纖譯の卄八迦葉品の中にあり、迦葉菩薩、如來を歎ずる偈中の文なり。大醫王とは佛陀を指す。世間の醫師は、肉體の病を癒し、出世間の醫王は、衆生の三毒の熱惱を除去して、身心を清涼ならしむ、故に大醫王と云ふ。智度論第二十一に「佛は醫王の如く、法は良藥の如し」とあるは此意なり。倶に寂靜なりとは、如來の身口意の三密は、倶に煩惱の喧雜を脫却して、寂滅澄靜なるを云ふ。無我とは、實我實法の妄執なきを云ひ、行者此二執を脫却して、眞如法性と融會し、此に法身と不二一體と成る。然るに法身四德の中に、我波羅蜜あり、之を眞我と名く、法身の常樂我淨の四德の中、我德は、是れ法身の大我なり。次に發心とは、顯教菩薩の修行地の三賢位中の初住の位を云ひ、密教には初發淨菩提心の位を指す。畢竟とは、顯教菩薩の第四十二位、妙覺果滿の位にして、密家にては行者が自心本有の心月輪を了々分明に證見する位を指す。先心とは、初發淨菩提心、即ち我等凡夫が本然の性德に薰動せられて、初めて善心を萠し、佛道修行せんとする其刹那の心を云

ふ。大毘盧遮那經 (Mahāvairocana-sūtra) は善無畏三藏の所譯にして七卷あり、今の所引は第一卷住心品の文なり。菩提 (Bodhi) とは、譯して知と云ふ、然るに普通は覺の意に取る。因は種子の意にして、萬善萬行之れより發生する意なり。大悲を根と爲すとは、行願の菩提心を指す、根は增上を義と爲す。愛他の念が萬善萬行の增上緣となりて、其善法を行する志念を益々固ふすること、恰も樹木に根幹ありて、風塵の爲めに易く枯死せざるが如きを云ふ。方便とは、三摩地の行相を指す。三摩地法は、行者の本有淨菩提心を顯發する手段方便なるが故に、方便の稱あり。

一段の意を略說せん、華嚴經の說に依れば、初地より第十地に至る迄、其の中間の地々に於て、皆大悲を主眼と爲すと說き、無量壽觀經には、佛心とは大慈悲是れなりと見ゆ、又北本涅槃の第二には、南無純陀、其身は人身なりと雖ども、其心は佛心に同じ、何んとなれば、純陀の愛他の悲念は、佛陀と異る所なければなり。又次に北本涅槃の二十八には、世間を憐愍し玉ふ大醫王は、身語意の三密、倶に煩惱の動亂を離れて淸淨寂靜なり。如來は人法の二執を離れて、凡て我念我想あることなしと雖ども、而も法身四德の中に於て我波羅蜜あり、之を眞我と爲す。此眞我を無上尊として、敬禮供

養す。又云く、菩薩最初の發心と、修行終局の佛地とは、二者明に異なれりと雖ども、實體實性は、而も同一如々の體なり、此如々一實の體の上に、因果の差別を立つれば、發心は因にして、佛地は果なり、中に於て發心を尤も難しとす、何んとなれば、自ら未だ生死の大海を度脫せずして、先づ他を度せんとす、是を以て迦葉尊者は、初發心の菩薩を敬禮すと申されき。菩薩の悲念、極めて甚深なるが故に、初發心の時に既に人天の導師たるの資格ありて、彼の自度自利を專らとする聲聞緣覺に遙に勝出せり。此の如く廣大の發心は、世間に比類すべきものなし、是故に最勝無上と名く、大日經全部は因根究竟の三句を出でず、因は淨菩提心にして、根は大悲化他門の行なり。更に五相三密の妙行を修し、此に本有の佛德を顯現するに至る、之を究竟と名く。委曲は大日經疏第一を參看す可し。

# 第四章　三摩地の菩提心

## 一、諸佛說法の由來

第三に三摩地とは、眞言行人、是如く觀じ已て、云何(イカ)んが能く無上菩提を證するや。當に知る可し、法爾に應に普賢大菩提心に住すべきを、一切衆生は、本有の薩埵なれども、貪瞋痴の煩惱の爲めに縛せらるゝが故に、諸佛の大悲善巧智を以て、此甚深秘密の瑜伽を說て、修行者をして內心の中に於て、日月輪を觀ぜしむ。

(講義)

三摩地とは、梵語にして等持又は定と翻す。等持とは、精神を均等に持し、其を一境に專注するの意。定とは、有ゆる雜念妄情を止息して、心を一境に定住せしむるの義なり。然るに今は身口意三平等に住して、自心の實相を觀見する秘觀を指して三摩地と名く。是如く觀すとは、勝義行願の二種の觀し方を指す。普賢大菩提心とは、普賢は具には普賢金剛薩埵と云ふ。是れ即ち我等凡夫の自心の實相を、人格的に名けたるものなり。大菩提とは、大有情の義にして、行者の自心の實相を、抽象的に名けたるものに外ならず。本有の薩埵とは、我等凡夫の心中に、潛在的に具はれる覺體、即ち本有の金剛薩埵を指す。甚深秘密の瑜伽とは、下に明す所の五相三密の秘觀にして、瑜

珈とは、行者と本尊と、不二一體となる妙行を云ふ。內心の中に於て云云とは、行者の心內に日月輪ありと觀し、此方便祕觀に依りて、遂に自心の明體を證見するに至るものとす。

此一段の大意を述ぶれば、第三に三摩地の菩提心とは、眞言行者先づ上の如く、行願と勝利との二種の淨菩提心を觀じ己て、次に信修すべきは、三摩地の妙法なりとす。此妙法とは、行者身口意の三平等觀に住して、自心本具の覺體を證見せんとする方法なり。抑々我等衆生は、本來法爾として、普賢金剛薩埵なれども貪慾・瞋恚・愚痴の煩惱惑染の爲めに束縛せられて、自由濶達なるを得ず。我等若し煩惱惑染を離脫すれば、本有の性德、忽爾として現前し、大日法王と塵毫の異りなきに至らん。大日法王は因位の大悲念力に動かされて、衆生攝取の善巧方便智もて、次に示す所の甚玄甚妙の秘觀を演說し玉へり。其祕觀とは、行者先づ自己の自性淸淨心を以て、蓮華臺と觀念し、此蓮華臺上に於て、本有の覺體は、日月輪の姿にて現前すと觀するなり。

## 二、月輪觀

此觀を作すに由て、本心を照見するに、湛然として淸淨なること、猶ほし滿月の光りの虛空に遍して分別する所無きが如し、亦は無覺了と名け、亦は淨法界と名け、亦は實相般若波羅蜜多海と名く。能く種々の無量の珍寳三摩地を含すること、猶し滿月の潔白分明なるが如し。何んとなれば爲く一切有情は、悉く普賢の心を含せり。我れ自心を見るに、形は月輪の如し。何が故に月輪を以て喩と爲るとならば、爲く滿月圓明の體は、則ち菩提心と相類せるを以てなり。

(講義)

本心とは、衆生本有の自性淸淨心を指す。湛然とは、水の澄み湛えて動搖なき貌にして、心の煩惱惑染を離れて動亂せざる姿を指す。滿月の光云云とは、行者本具の淨菩提心が、三密の妙行に依り、本尊に加持せられて、圓明無碍の智光を現するに喩ふ。無覺了とは、覺了せざるなき意、世間の謂ゆる覺了は、相對的なり。然るに今は出世間の絕對の覺了を明さんが爲めに、殊に無の字を冠す。淨法界とは、萬差の諸法歷然と

して、法の源所に居する姿にして、兩部の中には、胎藏曼荼羅、四重圓壇羅列の相に當る。實相般若波羅蜜多海とは、實相は萬有の眞實際の理にして、兩部の中には、胎藏の理界に當り、般若(Prajnāna)は譯して智慧と云ふ。是れ如來の萬有の實相を照見する用にして、兩部の中には、金剛智界に當る。波羅蜜多(Pāramitā)とは、到彼岸の義にし、即ち目的の處に到達せる意なり。海は千流萬川の歸入する處にして、諸善萬行の歸趣、即ち行者の淨菩提心に當る。之を要約すれば、行者月輪觀に住し、明に阿字本不生の理に悟入すれば、淨菩提の覺日、心蓮華臺上に冴え渡りて、諸法法界、中に於て歷然と現じ、淨明の智光に照らされて、諸法の當體、其儘金胎兩部の莊嚴藏と成るの意。珍寶三摩地とは、淨菩提開發の時に、行者の心眼に映する無量の功德藏を云ふ。普賢の心とは、具には普賢金剛薩埵の心と云ふ。即ち我等衆生が、本來具有する所の淨菩提心を指す。我とは、金剛界大日の自稱なり。見るとは、佛陀證悟の心眼に照して、自心の實相を證見するを云ふ(金剛頂經第一參看せよ)。次に月輪は、修生始覺の佛知見に喩ふ。月輪は白月一日より、夜每に明相を漸加して、十五日に至り、遂に圓滿無碍の光耀を放て四海を照すは、恰も三密瑜伽の妙行に薰發せられて、行者心內の寶藏、頓に開顯

して、本有の智光、身心の內外を照徹するに類す。我等の心の實相を月輪に喩ふるに凡そ二義あり。第一、淨菩提心の智光は、十方法界を照燿すること、恰も明月の山河叢林を照すが如くなるに喩へ、第二、我等の心の實相は、五相三密の秘觀に依りて、漸次に本性清淨の靈光を現すること、恰も月輪が、白月一日より、漸々其明分を增して、十五日に至りて、圓滿無碍の光明を放つに喩ふ。三乘權敎は、有ゆる有形の事物を指して、識所變の影像なりと說き、顯敎一乘敎は、現象も實在も、共に常住不壞なりと談すれども、敎理の極底は、遂に心の一元に歸入す。密敎は之れに反して、有形の事物に就て、無形の玄理を說き、無形の深理を、有形の物象中に觀見し、當相即道の深理を、實修實踐するが故に、心象に形質ありと說く。金剛頂經第一に「我れ自心を見るに、形は月輪の如し」とは、明に此深理を表明するものなり。

此の一段の大意を述ぶれば、眞言行者、親り阿闍梨に就き、月輪觀の作法を受け、法則に順據して、日夜精修して怠らざれば、程なく自心の實相を開見し、明々瞭々に自心佛を諦觀することを得、有ゆる妄念妄情は蕩然として除去せられ、湛然靜寂として十方法界を照すこと、恰も秋夜の明月、中天に懸りて、山川水澤を照すが如く、是の如

くの妙境界は、凡夫の能く推斷測知し得る境致に非ず。之を經には無覺了、淨法界、又は實相般若波羅蜜多海等と名く。是れ謂ゆる秘密莊嚴の妙境界にして、出世間の妙寶珍財は、皆な此中に攝在せらる。我等有情の萬類は、本より圓明清淨の心德を抱持するが故に、如說に修行すれば、忽に自心の本際を證悟することを得べし。昔し悉達太子は、一切如來の驚覺開示に接し、觀察自心三昧に住して、自心の實相を照見して「我れ自心を見るに、形は月輪の如し」と宣說せられたり。是れ菩薩證悟の直觀なり、實證なり。然るに今は未了解の人に對して、淺說して喩說と爲す。而も實には色心不二、即事而眞の故に、事を離なれて理なく、理外に事なし。故に心內月輪の相、即是れ自心本然の姿なり。

## 三、金剛界十六尊と月輪の十六分

凡そ月輪に一十六分あり。瑜伽の中の金剛薩埵より、金剛拳に至る迄、十六大菩薩者あるに喩ふ。三十七尊の中に於て、五方の佛位に、各々一智を表す。東方の阿閦佛は、大圓鏡智を成するに由て、亦金剛智と名け、南方の寳生佛は、平等性智を成するに由て、亦灌頂智と名け、西方の阿彌陀佛は、妙觀察智を成するに由て、亦蓮華智と名け、亦轉法輪智と名く、北方の不空成就佛は、成所作智を成するに由て、亦羯磨智と名け、中方の毘盧遮那佛は、法界智を成するに由て本と爲す。

(講義)

十六分とは、晦日の夜、太陽と月輪とは、地球に對して同一の側面にありて、月輪と太陽と相重るが故に、月輪は全く明相を現せず、之を合宿際と名く。此合宿際を經過すれば、月輪は漸次に一分の明相を現す。吾人の肉眼には見えずと雖ども、晦日の夜、既に一分の明相を現ず。晦夜の一分の明相と、一日より十五日に至る、夜毎の明相とを合算して、十六分と說く、明相十六分具足して、圓明無碍の月輪と成る。瑜伽とは、金剛頂經を指す。三十七尊とは、行者の淨菩提心の德相を、人格的に分類して、特殊の性能を顯示したるものにして、三十六德を綜合統一せる佛格を、金界大日と爲す。大日如來は、普門の尊、三十六尊は、別德の尊なり。三十六尊中の金剛薩埵は、自性清淨心の

德相が、我等凡夫に潛在せるを、人格的に名けたるものにして、自性淸淨心の德相が、我等の身心の上に顯現せるを大日如來と名く。故に大日如來と、金剛薩埵とは、因果一體の身なり。眞言行者が、所觀の本尊を客觀界に求めずして、行者の主觀界に求むるは、其理全く此れに基く。金剛薩埵の初發淨菩提心の因位より、悲智圓滿の果位に至る迄、淨菩提心の歷展の姿を具體的に明示したるもの、是れ實に三十七尊なりとす。委曲は金剛頂經開題を見よ。五方の佛位に各々一智を表すとは、東西南北の四方と、並に中央との五方に配して、大日尊の身を空間的に說明するを表す。大日普門の尊格は絕待にして、吾人の推理の及ぶ所にあらず。其不可知界の絕待を、可知界の方處に寄せて說示するもの、之を五方五佛と爲す。太陽は東に登り、南に中し、西に沒し、翌朝更に東天に現る。方位は是比譬にして、世間の方角を指すに非ず。大日經疏第四に「又東方寶幢佛の如きは、乃ち是れ初發淨菩提心の義なり。豈但四方の解を爲すを得んや」とあるは、此の意を示す。由是考ふるに、東方は太陽の初めて地平線に現はるる方位にして、恰も是れ眞言行者の初發淨菩提心の位に類似し、南方は太陽が西方に向て進む途次にして、眞言行者の修行位に類し、西方は太陽の到達點にして、行者



の目的たる菩提心證悟の位に該當し、北方は太陽の現はれざる方位にして、諸善萬行成滿して、行者自證の極位に安住するに類す。然るに東南西北の四方は、本と中央を豫想して始めて存在し得るが故に、中央は四方の基點なりと同時に終局點なり。故に中央は行者の自利他利の行、圓備するに類す。此五方を遊歷する太陽は、行者の自心の實相たる淨菩提心を表す。其初發淨菩提心の當位を人格的に、將た又空間的に稱して東方阿閦佛と名け、其淨菩提心の轉進轉妙の相を、空間的と佛格的とに示すもの、之を南方寶生佛と云ひ、又淨菩提の心蓮開敷して、心內の佛身を現じたるを、西方阿彌陀佛と名け、次に淨菩提心の抽象的の觀念が具體化して、佛身圓滿、相好具足の身を現じたるものを、北方不空成就佛と名け、此佛身が因位の悲念に動かされて、微妙嚴好の身相を現して、下衆生を照覽し玉ふもの、之を中央大日尊と爲す。東方阿閦佛とは、行者の淨菩提心の初發の位に名く、阿閦は梵語の具音には Akṣobhya と云ひ、不動と譯す。是れ行者所具の淨菩提心の堅固不動の德を佛格的に名けたるものなり。吾人凡夫の本然の性德、十方三世の諸佛に驚覺せられて、初めて覺醒する所なるが故に、此尊を東方に配す。大圓鏡智とは、大は邊際なき義、圓は具足の義、鏡は萬

象を照映する義、智は決斷簡擇の義、行者發心の位に於て、第八識心田に於て、淨菩提心の眞實相を證見し、諸法萬有の眞實の姿を自心中に於て歷觀し、恰も大圓鏡中に、山岳河海、歷々乎として映現するが如きを云ふ。委曲は秘藏記並に三十七尊心要を見よ。金剛智とは、淨菩提の智にして、此智は地獄餓鬼等の六趣にあるも、毫も毀損することなきが故に此名あり。南方寶生佛とは、行者の淨菩提心の德相の成育する位に名く、寶生とは、梵語のRatma-sambhava の譯なり。此尊は寶瓶を持して、眞言行者を灌頂し、之れに依りて行者淨菩提心の種子、益々發育し、諸善萬行功德の妙寶、皆な此佛の加持護念力に依りて出生するが故に、寶生佛の名あり。平等性智とは、行者第七識の作用、阿字淨菩提の智水に淨化せられて、情非情我他彼此の隔執なく、平等に諸法萬有を照す智なるが故に此稱あり。灌頂智とは、南方寶生尊は、灌頂を主る尊なり、此尊主の智なるが故に灌頂智と名く。西方阿彌陀佛は、行者淨菩提の心蓮開敷せる位に名く、阿彌陀 Amitāyus は、無量壽と譯す。行者諸法の眞實際に到達せる所、諸法の眞實際は、無始無終にして生滅去來あることなし、之を無量壽と名く。妙觀察智とは、行者の妄念妄執に動搖せらるる第六意識は、無量壽佛の加持力に依りて、諸法の眞實際を妙に觀察思念する智用を現ず、故に此名あり。蓮華智とは、蓮華胎藏中より發生する智なるが故に此稱あり。轉法輪智とは、無量壽佛は、悲德の化現にして、說法の德を掌り玉ふ、此の尊格の智なるが故に、轉法輪智と名く。北方不空成就佛は、行者淨菩提心の智果成熟せる位に名く、不空成就とは、梵語 Amogha-siddha の譯、所作旣に成辨して空しからざるが故に此稱あり、釋迦如來の異名なり。成所作智とは、眼耳鼻舌身の五識、不空成就佛に加持せられて、所作悉く成辨せざるなき智用を現ず、故に此名あり。羯磨智とは、羯磨(Karma)は譯して業と云ふ。大悲願力の風に扇ふがれて、上は諸佛の事業を成し、下は衆生の事業を辨ぜしめ玉ふ、故に此稱あり。中央毘盧遮那は、淨菩提心の悲智定の三德、眞言行者に具體的に顯現せるを稱す。毘盧遮那 Vairocana は日と譯す、具なる梵語には摩訶 Mahat の二字を加ふ、故に大日と稱す。大日尊は阿閦寶生等の四佛の總尊にして、四佛は大日普門法身の四大德を、佛格的に別開したるものに外ならず。故に四佛と大日尊とは、總別不二一體の尊格なり。法界智とは、四智の總體にして、法界涯を照すの智なり。法身如來の身口意の三密は、法界涯に遍在し發しては萬差の諸法と現はれ、入ては普門法身の一智に歸す。本と爲すとは、大日如

來の尊格は、四佛の本にして、大日如來の智用は、四智の起點なると同時に歸趣なり、故に本と爲すと云ふ。

一段の意は、月輪は合宿際の時より、漸次に明相を増加して、十六日を經て圓滿無碍の月輪と爲る。眞言行者、初め發菩提心の金剛薩埵の位より、一位毎に身心の德相を顯現し、第十六の金剛拳菩薩の位に至て、始めて自心の眞實相を明々了々に覺知するに至ること、恰も彼月輪の如し、故に行者の心の實相を月輪に寄せて示す。

巳上の四佛智より、四波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩は金寶法業なり。三世一切の諸聖賢、生成養育の母なり、是に印成法界體性の中より、四佛を流出す。四方の如來に、各々四菩薩を攝す。東方の阿閦佛に、四菩薩を攝す。金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛善哉を四菩薩と爲すなり。南方の寶生佛に、四菩薩を攝す。金剛寶、金剛光、金剛幢、金剛笑を四菩薩と爲すなり。西方の阿彌陀佛に、四菩薩を攝す。金剛法、金剛利、金剛因、金剛語を四菩薩と爲すなり。北方の不空成就佛に四菩薩を攝す、金剛業、金剛護、金剛牙、金剛拳を四菩薩と爲す。四方の佛の各の四菩薩を、十六大菩薩と爲すなり。

**(講義)** 四佛智より四波羅蜜菩薩を出生すとは、智德より定德の出生することを示す。佛菩薩を智定の二德に配すれば、佛は智德を表し、菩薩は定德を表す。智は定より生し、定は又智より生す。故に定慧は互に能所生と爲る。四波羅蜜菩薩は、本と法界體性智所屬の定德の四菩薩にして、法界智に、四智の總體なり。總體は別體の總和なり。此の見解よりすれば、四佛智は、大日法界智に對して能生なりと爲すを得可し、隨て法界智の所屬たる四波羅蜜菩薩も、均しく四佛智より出生すと言ふを得可し(是れ當論の意)。次に法界智を別開したるものを四智とすれば、四智は法界智所屬の四種の定德の菩薩より出生せるものと說かざる可らず(是れ秘藏記の意)、即ち定慧の二德は互に能所の關係あるを知るべし。當論の意に依れば、東方阿閦佛より、金剛波羅蜜菩薩を出生し、南方寶生佛より寶波羅蜜菩薩を出生し、西方阿彌陀佛より法波羅蜜菩薩を出生し、北方不空成就佛より業波羅蜜菩薩を出生す。四菩薩の中、金剛とは、堅固

不壞を義とし、即ち菩薩の智を表し、寶は淨菩提心如意寶の德を表し。法菩薩は、說法の德を示し、業菩薩は化他の妙業を表す。此金寶法業の四尊は、大日如來の定德を具體的に說示したるものなり。三世一切の諸の聖賢の生成養育の母なりとは、四波羅蜜菩薩は、諸佛諸尊の生成發育を助くることを表す。三世一切の諸佛諸尊は、本來法身大日の化他の分身にして、其本地を探ぐれば、皆大日の本法身に歸入せざるはなし。大日化他の分身は、佛陀大慈光の中より活現せる智用を佛格的に見たるものに外ならず。然るに有ゆる智用は、悉く皆本法身の定德より出生す。故に今本法身の定德の四菩薩を以て、諸佛諸尊の能生養育の母と說くなり。是に於てとは、以下四佛の能生を說くが故に、文勢の轉換を明す。印成とは、印可成就の義、即ち法界體性の智體は、圓に成熟せるを諸佛の證明印可し玉ふ意なり。四方の如來に四菩薩を攝すとは、四菩薩の各尊は、中央に位し玉ふ佛陀の定德を、具體的に別開したるものに外ならず。又五佛の中に於て、中央の大日尊は、自證の極位に居する尊格にして、是れ即ち本法身なり。此本法身が化他門に出でて、地上の諸大菩薩に對して說法し玉ふ尊格を、四方の四佛と爲す。次に本法身が更に下下來して、地前の菩薩、若しくは我等凡夫に對して說法敎化し玉ふ尊格を、四佛の四方に侍し玉ふ所の十六大菩薩なりとす。東方阿閦佛に四菩薩を攝す云々とは、東方阿閦佛內證の功德に、薩、王、愛、善の四菩薩を攝在する意、中に於て金剛薩埵は、我等衆生の堅固常住の覺體を指し、金剛王は、眞言行者の自他に對して自在を得る德を云ひ、金剛愛は、本性淸淨の愛德を指し、金剛善哉は歡喜の德を表す。南方の寶生佛に四菩薩を攝す云云とは、南方寶生尊の內證の德に寶、光、幢、笑の四菩薩を攝在する意。金剛寶とは、淨菩薩心の如意寶より生する諸善萬行を指示し、金剛光とは諸善萬行の寶の、一切有情界を照す德を云ひ、金剛幢とは、菩提心の幢旗を樹て、善く衆生に珍財を分つ德を表し、金剛笑とは、普く珍財を施與して、自他共に歡喜する德を表す。西方の無量壽佛に四菩薩を攝す云云とは、阿彌陀佛の慈光中に法、利、因、語の四菩薩を攝在する意を示す。金剛法とは、普く正法を衆生に施與して、自他共に覺悟の妙境に進まんとする德を表する尊にして、觀自在菩薩即ち是なり。金剛利は普く衆生に智慧の利劍を施與して、迷妄を斷除せしむる德を掌る尊にして、文殊菩薩是れなり。金剛因は未來世に於て、一切有情の爲めに、大法輪を轉じ玉ふ尊にして、彌勒菩薩是れなり。金剛語は、正しく一切衆生に親近して、說

法談義し玉ふ尊にして、淨名菩薩即ち是なり。北方不空成就佛に四菩薩を攝す云云とは、北方不空成就佛の內證の德に業護牙拳の四菩薩を攝在する意、金剛業は正しく化他の業用を指し、金剛護は行者の善業を愛護し玉ふ尊にして、般若菩薩是れなり。金剛牙は衆生の煩惱業障を嚼食し消滅せしめ玉ふ尊にして、異名を摧魔怨菩薩、又は金剛夜叉菩薩と云ひ、最後に金剛拳は善業より出生せる功德を拳持して散逸せしめ玉はざる德を尊格視したるものなり。四方の四菩薩を併せて十六大菩薩と稱す。此十六尊は十方三世の諸尊中に於て、誓願力尤も優れ玉ふが故に、十六大菩薩として、殊に行者の信奉する尊となすなり。

十六大菩薩は、之れを佛陀の側より說けば、上に說く如くに、四佛內證の德を、尊格的に別開したるものなれども、若し之を眞言行者の側より見る時は、行者本具の淨菩提心の德相が、五相三密の秘觀に加持せられて、漸次に其實相を顯現し來る姿を尊格に寄せて示したるものなり。

三十七尊の中に於て、五佛、四波羅蜜、及び四攝八供養を除て、但十六大菩薩の四方佛の所攝たるを取る。又摩訶般若經の中に、內空より無性自性空に至るまで、亦十六の義あり。一切有情の心質の中に於て、一分の淨性あり、衆行皆備はれり。其體は極微妙にして、皎然明白なり。乃至六趣に輪廻すれども、亦變易せず、月の十六分の一の如し。凡そ月の其一分の明性、若し合宿際に當れば、但日光の爲めに、其明性を奪はる、所以に現せず。後起つ月の初めより、日々に漸く加して、十五日に至て圓滿無礙なり。所以に觀行者、初に阿字を以て、本心の中の、分の明を發起して、唯漸く潔白分明ならしめて、無生智を證す。

（講義）

三十七尊の中に云云とは、十六大菩薩と、行者の淨菩提心開發の姿と、極めて密接なる關係あるを示す。三十七尊は、本と阿字淨菩提心の德を、人格的に表現したるものなるが故に、行者の淨菩提心と、三十七尊とは、其體一なるは勿論なり。然るに今殊に十六大菩薩のみを以て、行者の淨菩提心開發に比例するは、十六の數が、月輪の十六分と相似たるが爲めなるべしと雖ども、尙ほ一には十六大菩薩は、三十七尊中の

因位の智德を表する點に於て、行者の淨菩提心開發と、殆んど其軌を一にするに依れり。何んとなれば、三十七尊を定慧の二門に區分すれば、五佛と十六大菩薩とは、智慧門に屬し、四波羅蜜・四攝・八供養の十六尊は、定門に屬す。然るに淨菩提心は、行者の無垢清淨の智慧なり。此無垢の淨智に對比すべきものは、勿論智慧門の尊格ならざる可らず、智慧門の尊格中、五佛は果上の尊身、十六大菩薩は因位の尊身なり。故に行者因位の淨菩提心の開發の相を、十六大菩薩に對比して示すは充分の理由あるを知るべし。又摩訶般若經中云云とは、同經第四百八十三卷の文なり。謂ゆる十六空とは、內空と、外空と、內外空と、大空と、空空と、空勝義空と、有爲空と、無爲空と、畢竟空と、無際空と、無散空と、本性空と、相空と、一切法空と、無性空と、無性自性空と、已上是れなり。此十六空は、顯敎眼より見れば、十六空の理に過ぎざるも、之を密敎眼より見れば、相好具足の十六大菩薩と爲すなり。文は執見に因て隱れ、義は機根を逐て顯ると、實に此の謂へ歟。金剛般若經開題に「內空より乃し無性自性空に至るまでの十六空門は、皆是れ薩寶等の十六大菩薩の三摩地門なり。此十六大菩薩の三摩地法門に、能く一切の敎法を攝す」とあるは此意なり。心質とは、梵に干栗馱耶(Hṛdaya)心と云ひ、處中心と譯す。處中心とは、事物の中心を指す意にして、諸物生成發育の核實に當る。然るに人類の生成發育の源を爲すものは心臟なり。故に心臟を指して今は心質と云ふ。一分の淨性とは、本有の覺體、即ち淨菩提心を云ふ。皎然とは、月色の明白なる貌を指す。後起つ月の初めとは、晦夜の合宿際の後、月明の還生するを云ふ。阿字は心月輪の種子なり。心月輪とは、行者本具の淨菩提心の姿なり。又光明なり。本心の中の分の明とは、本來自性清淨心中の一分の明相、即ち淨菩提心を指す。淨菩提心は、其が種子たる阿字の加持力に依りて、漸次に其德相を開發するが故に、阿字を以て本心の中の分の明を發起すと云ふ。無生智とは、無始本有より、我等衆生に具はれる智にして、一名無師智、又は自然智と稱す。

一段の大意は、三十七尊の中に於て、眞言行者、淨菩提心開發の際に、所觀の尊格と爲るは十六大菩薩なりとす。是れ行者本具の淨菩提心の十六種の德相を、客觀界に具體化せるものに外ならず。彼大般若經中に示す所の十六空は、之を顯敎より觀れば單なる理に過ぎざるも、之を密眼に照す時は、人法不二なるが故に、十六空は即ち十六大菩薩なりとす。凡て有情の萬類に、是非を識別する微かなる智光あり。此智光は

惡趣に墮在するも不滅にして、恰も是れ滿月の光の十六分の一の如し。此一分の明相も、陰暦晦夜の合宿際には、其の姿を失ふと雖ども、唯是れ明相を現ぜざる迄にして、月輪の本體に至りては、依然として不增不滅なり。我等の本心に、元來大日法身在すと雖ども、無始の罪垢に覆蔽せられて顯現せず。如來方便力を以て、行者に心外の月輪を觀せしめ、此心外の月輪を、頓て心內に招入して、心內の淨菩提心の智光と不二一體ならしめ、是に於て行者心外の月輪に即して、心內の阿字素光の色を觀見し、斯くして信修時を經るに隨て、煩惱の罪過、自ら雲散し、任運に阿字本不生際の妙境に流入するに至らん。此時生得の眞智、忽に發得し、曼荼の寳城、目前に現出するに至る、之を眞言行者の成佛と爲す。

## 四、阿字義並に阿字觀

夫れ阿字とは、一切諸法本不生の義なり。

毗盧遮那經疏に准して阿字を釋するに具に五義あり、一には阿字短聲、是れ菩提心、二には阿字引聲、是れ菩提行の義なり、三には暗字短聲、是れ證菩提の義なり、四には惡字短聲、是れ般涅槃の義なり、五には惡字引聲、是れ具足方便智の義なり、又阿字を將て法華經の中の開示悟入の四字に配釋せば、開の字は、佛知見を開く、即ち雙て菩提心を開くは、初の阿字の如し、是れ菩提心の義なり。示の字は、佛知見を示す、第二の阿字の如し、是れ菩提行の義なり。悟の字とは、佛知見を悟る、第三の暗字の如し、是れ證菩提の義なり。入の字とは、佛知見に入る、第四の惡字の如し、是れ涅槃の義なり。惣して之を言はば、具足成就の第五の惡字なり、是れ方便善巧智圓滿の義なり。（本文細註）

即ち阿字は是れ菩提心の義なり。讃頌に、曰く、

八葉の白蓮、一肘の間に、阿字素光の色を炳現す、

禪智倶に金剛縛に入れて、如來寂靜の智を召入す。

（講義）

阿字は宇宙最玄の祕處にして、之れを形、色、音、義、の四方面より觀察することを得（一）阿字は方形なり。凡て方形なるもの、並に部分的に方形を有するもの、是れ皆な阿字の顯現なりと爲す。（二）阿字は白色なり。故に全分若しくは部分的に白色を帶する

ものは、皆是れ阿字の姿なりと爲す。(三)阿字は開口の音なり。苟も開口して發する音は、皆な悉く阿字の響きを傳ふるものと爲す。(四)阿字は諸法本不生際の義なり。本不生際は、諸哲學の根本原理にして、研究思辯の出發點なると同時に歸着點なり。方圓三角團形の諸形體は、其原形を方圓の二形と爲すを得可く、更に圓形は方形の無限の集まりと見るを得可し。故に有ゆる形體は、方形の一元に歸す。此一方形が、千變萬化して、有ゆる形體を組織すと見ることを得べし。次に黄青赤白等の諸色中の素色を形成するものは、白色なり。白色は黄たり、赤たり、青たり得るも、餘色は他の色に變化すること極めて難し。此意味に於て、白色を以て諸色の原色なりと言ふを得べし。吾人の發する音響の中に於て、阿字は開口の音にして、是れ有ゆる音韻の單元なるものなり。斯く考へ來れは、吾人の耳に響き、眼に映じ、思に浮ぶもの、一事一物として阿字ならざるはなし。之を阿字の有の義と爲す。然るに吾人若し感覺の窓を悉く閉ぢ、併せて經驗より得たる有ゆる印象を除き去らば、果して何物か殘存せん、客觀の世界滅却し去らば、之れに對する主觀の世界焉んぞ存在するを得んや。斯の如く主觀界なく、客觀界なくんば、我等の心頭果して何物かあらん。之を阿字の空の義と爲





す。感覺の窓を開けば、現象世界は現出し、感覺の窓を閉づれば、現象世界は、頓に消失す。現象界の現出を有と云ひ、現象界の消失を空と云ふ。然るに飜て考ふそに心頭一塵の念想なき所、果して是れ空虚なりや。吾人の經驗に依りて得たる印象を悉く除去すれば、果して如何なるものにか遭遇せん。宇宙の眞實際が、本來果して空なりとせば、其空なる眞實際より、如何にして吾人の感覺の窓を刺戟する物象は生起するに至りしか。之れに反して、宇宙の眞實際、本來有ならば、心頭一塵の念想なき時に、實感する湛然空寂の相は、那邊より來れるか。此有空の問題は、印度の佛教哲理の根本問題にして、今尙ほ未決に屬す。然るに阿字の禪觀に住して、實修實觀すれば、心頭を滅却し去る時に、有は去り空は來るに非ず。又感覺の窓を開く時に、空は去り、有は來るにあらず。實修實觀に徵すれば、空、有に去來なし、有は宛然として是れ空、空は宛然として是れ有なり。是に於てか、即ち知る、有も不生、空も不生なり。有門空門の二大原理の裏面には、不生の最大原理の横はれるあり。之を阿字諸法本不生際の義と名く。大日經疏第七、供養次法疏卷下を參看せよ。毘盧遮那經疏に准するとは、二十卷の草本には、此文なく、但し五點阿字の事は、第二十卷に其意味を說くのみ。法華經の開示

悟入の事は、全く第二十巻に見えず。此は十四卷の義釋の文なり。義釋の意を圖にて示せば、

| (阿　字) | (法華經の要旨) | (胎藏五佛) |
| --- | --- | --- |
| 阿短聲菩提心 | 開 | 寶幢　東 |
| 阿引聲菩提行 | 示 | 開敷　南 |
| 暗短聲證菩提 | 悟 | 無量　西 |
| 惡短聲般涅槃 | 入 | 天鼓　北 |
| 惡引聲具足方便智 | 方便善巧智圓滿の義 | 大日　中 |

大日經疏は、無畏三藏の講演を、一行禪師の筆記せるものにして、二十卷の疏は、大日經の第一卷より、第六卷迄の講演筆記の草本なり。此草本を智儼溫古の兩人が、修正したるものを、十四卷の義釋と爲す。東密家は、高祖時代より、専ら二十卷の草本を依用す。今所引の十四卷の義釋の文は、譯者不空三藏か、若しくは後人が加へたるものにして、當論の原文にはあらざるべし。八葉の白蓮とは、阿字所住の座を云ふ、八葉は胎藏曼荼羅中臺八葉を指す。此八葉は四佛四菩薩醍醐の果德を表す、四佛は果上の智、四菩薩は果上の定にして、八葉は即ち普門大日法身の定慧二德の標幟なり。白蓮とは、白は無垢染の色、蓮に汚泥に染まざる淸淨の德あり。凡て無形の理を有形の事物に寄せて觀せんとするは、眞言家の特徵なりとす。一肘の間とは、月輪の大さを示す。一肘は十六指量にして、一指量は、凡そ五分、故に一肘は、八寸位なりとす。阿字素光の色とは、阿字の種子より發する淨菩提心の智光なり。淨菩提の智光は、即ち是れ月輪なり。月輪は如來寂靜智の光明なり。次に素は白なり、炳は明なり。即ち今心外の壁上に懸くる月輪は、本普門大日の智光の姿を表す。行者は心外壁上の月輪に對して、是れ即ち自心の淸淨無垢の心相と、毫も異ることとなきなりと、觀想して了了に其を觀見し、次に此月輪を心内に召入するなり。禪智倶に金剛縛に入れてとは、入智合智の印を示す。此印は先づ金剛内縛の印を結び、次に禪(左の大指)と智(右の大指)とを金剛内縛中に入れ、又次に左右の兩頭指を延べ出して、兩頭指の尖端にて、心外の月輪を挾み入るる勢を示すを云ふ。如來寂靜智とは、事相に付て云へば、壇上の月輪を指し、教理の上より說けば、如來の寂靜智なり。如來の智慧は、定慧相應せるが故に、凡夫の散動せる智慧に對して、佛智を寂靜智と名くるなり。抑々金剛内縛の印は、合蓮華

の形を表し、合蓮華は、凡夫の心を示す。而も八指共に金剛縛中にあるは、四佛四菩薩醍醐の果德を、既に因位の凡心中に、本有法然として具備せるを表す。金剛内縛中へ、二頭指を以て、壇上の月輪を召入するは、精進力(左右の二頭指は、十度の中には進力に當る)に依りて、佛知見を開くを示す。即ち事相に付て說かば、壇上の阿字素光の色を、行者の凡心中に召入す。行者の凡心は、此阿字素光の色に加持せられて、凡心の合蓮華は開敷し、四佛四菩薩醍醐の果德、即時に顯現し、是に於てか、行者は大日法身と不二一體と成る。故に阿字月輪觀は、即身成佛の徑路なり。

心外の八葉白蓮も、阿字素光も、本と別物に非ず。行者自心の實相の現はれなり。而も此自心の實相たるや、隱密にして之を觀見すること極めて難事なり。故に心外の事相に寄せ、之れに全精神力を集注し、此勝方便力に依りて、行者の妄想雜念、頓に一掃し去られて、此に行者本有の白蓮開敷して、無垢清淨の智光を放つに至る、之を自心の實相、又は自心佛、若しくは百光遍照の大日尊と名く。

扶れ阿字に會はんとする者は、皆な塞れ決定して之を觀せよ。當に圓明の淨識を觀ずべし。若し纔に見る者をば、則ち眞勝義諦を見ると名け、若し常に見る者は、則ち菩薩の初地に入る。若し轉た漸く增長すれば、則ち廓、法界に周く、量、虛空に等し、卷舒自在にして、當に一切智を具すべし。

(講義)

會ふとは悟解する義。之とは、下の圓明の淨識を指す。圓明の淨識とは、第八第九第十の心識を指す。顯敎には、之を自性清淨心と名け、密敎には心月輪と名く、第八等の心識の體性は、圓明清淨なること、猶ほし滿月の如し、故に心月輪と稱す。見とは、禪觀中に、自心の實相を證見することを云ふ。眞勝義諦とは、眞實殊勝の諦理、即ち阿字諸法本不生際の理に名く。卷舒自在とは、自身の心月輪を舒べて、宇宙法界涯に遍滿せしめ、若しくは其を卷て小豆大と爲して、鼻端に懸くる等、伸縮往返自在なるを云ふ。一切智とは、一切萬有を徹見する智慧を指す。

意は謂く、凡そ阿字本不生際の理に、通達悟入せんと欲する者は、皆な先づ須らく自心の圓明の淨識を觀すべし。若し纔に自心の相を觀るものあらば、之を眞勝義諦を見ると名く。若し夫れ行住坐臥に、淨識の明體を見る者あらば、其人は既に菩薩の初

位に入りたるものなり。尙ほ觀念成熟して、行者心月輪に對して自在を得、或は其を增廣して宇宙に遍在せしめ、或は其を短縮して少豆大と爲す等、悉く是れ意の如くなれば、是の如き行者は、眞に自心の本際に達悟するものにして、遍法界の大日法身と等同なり。行者此幽致に進まば、一切萬有、皆な自心の中にありて、了々分明に知見することを得るなり。

## 五、五相三密の秘觀

凡そ瑜伽の觀行を修習する人は、當に須らく、具に三密の行を修して、五相成身の義を證悟す可し。言ふ所の三密とは、一に身密とは、契印を結び、聖衆を召請するが如き是れなり。二に語密とは、密に眞言を誦して、文句をして、了々分明ならしめ、謬誤なからしむるなり。三に意密とは、瑜伽に住して、白淨月の圓滿に相應して、菩提心を觀ずるが如きなり。

（講義）

契印とは、佛菩薩の本誓を表す。佛菩薩は本誓を憶念し玉ふが故に、手に印契を結ぶ所の行者に對して、必ず加持護念し玉ふ。聖衆とは、行者の念願する本尊を意味す。召請とは、行者所願の本尊を、他方世界より修行の導場へ奉迎する作法を云ふ。眞言とは、諸佛菩薩の名號、若しくは本誓なり。佛菩薩の誓言は、毫も虛僞なきが故に、眞言と名く。瑜伽とは、相應の義、即ち身口意の三業相應合して、口に唱ふる如く意に觀じ、意に觀する如く身に行し、斯くして身口意の三業同一事に安住するを云ふ。

一段の意は、凡そ眞言行者は、諸善萬行を爲すに、先づ三密の行を修し、五相成身の祕觀に入らざる可らず。三密の中、第一身密とは、手に印契を結び、本尊を壇場に奉請するが如き作法を云ひ、第二語密とは、口に本尊の聖言を誦じ、文句を明了ならしめ、微少の誤謬なきを云ひ、第三意密とは、禪觀に安住し、自心と壇場の月輪と、不二融會せしめ、斯くて自心の實相を諦觀するを云ふ。大日經疏第三に「三密の方便に依り、自心澄淨なるが故に、諸佛の密嚴海會、悉く中に於て現す」と說き、又同疏第四に「我れ未た一切如來に同するを得ずと雖ども、然も毗盧遮那の三密を以て加持せらるが故に、亦能く佛身を現作す」と示すは、即ち三密行の殊勝を證するものなり。

次に五相成身を明さば、一には、是れ通達心、二には、是れ菩提心、三には、是れ金剛心、四には、是れ金剛身、五には、是れ無上菩提を證して、金剛堅固の身を獲るなり。然も此五相具に備れば、方に本尊の身と成る、其圓明は則ち普賢の身なり。亦是れ普賢の心なり。十方の諸佛と同なり。亦乃ち三世の修行證に前後あれども、達悟に及び已んぬれば、去來今なし。

(講義)

五相成身とは、五個の禪觀の次第を經て、佛身を成する意。此禪觀の次第は、專ら金剛頂經に明す。即ち是れ眞言行者の顯得の即身成佛の次第なり。通達心とは、一に通達菩提心とも云ふ、眞言行者、始めて自心本具の淨菩提心を識知せんとして、觀察自心三昧に住して、始めて自心の姿を見ること、恰も滿月輪の輕霧の中に在るが如きを見るを云ふ。次に菩提心とは、一に修菩提心と云ふ、行者自心の實相を、益々顯明に覺知せんが爲めに、勤修精進して、淨菩提心觀を修習するを云ふ。淨菩提心觀とは、淨月輪を觀すること是れなり。第三に金剛心とは、一に成金剛心と名く、此は所觀の淨月輪の中に、妙蓮華ありと觀する行相を云ふ。第四に金剛身とは、一に證金剛身と名く、遍虛空の諸佛聖者皆な來て、所觀の摩尼蓮華輪中に入りて、合して一體と成ると觀する作法を云ふ。第五に證無上菩提とは、一に佛身圓滿と名く、行者は所觀の蓮華輪寶の身と成り、蓮華輪寶の身は、更に轉して本尊と成ると觀じ、此に至て本尊と行者と全く不二の身と成り、行者は變して微妙嚴好の本尊の身を現じ、普く自利利他の諸願を滿するなり。委くは金剛頂經並に持寶次第等を參看せよ。本尊とは、梵に伊瑟吒提縛多 (Iṣṭa-devatā) と云ひ、是行者自心の實相なり。行者自心の實相は、即ち毗盧遮那本地の妙身なり。祕藏記に「我が本來自性清淨の心は、世間出世間に於て、最勝最尊なり。故に本尊と云ふ。又已成の佛の本來自性清淨の理も、世間出世間に於て、最尊最勝なり、故に本尊と曰ふ」とあり。五相成身の觀門は、已成佛の自性清淨の理を、未成佛の行者の自性清淨心中に召入する行相なり。本尊の身を證成するに法則あり、此法則に異すれば、禪觀遂に成就せず。大日經疏第二十に「彼行者猶ほ身印と眞言と及び本尊を觀すること、此三事和合するが故に、本尊即ち自ら道場に降臨し來て、而も加護し玉ふなり。然も此行者初行の時は、尙ほ是れ凡夫にして、自ら德力なし、何ぞ能

く即ち佛菩薩等の、是の如く應ずることを感せんや。但し彼佛菩薩等は、先きに誠言の大誓願を立て玉ふに由るが故に、若し衆生有て、我が此法に依て之を修行して、法則を虧かずんば、我れ必ず冥應せん。或は來らずと雖ども、而も遙に之を加護せんと、若し行人の行、如法ならんに、而も應赴せずんば、即ち是れ本所願に違するが故に、應ぜざることを得ざるなり。明珠方諸は、月に向へば水降り、圓鏡日に向へば火生すること、因縁相應して、思念なきが如し、此法も亦喩と爲しつべし。是れ諸佛の心行有て、而も凡夫に同して赴應するに非ざるなり。若し心相應せず、事縁闕することあれば、則ち本尊護念を加へざるが故に、應驗なきは、佛菩薩等の過ちに非ざるなり。然も行者此事を以ての故に、當に須らく、本尊の清淨の身を觀ずべし、清淨の身、若し見已れば、即ち自身を以て、而も本尊の身と爲す。是の如くして疑慮なければ、所求の悉地、果を成せざることなきなり」と示す。實觀實修の大士、須らく疏の意を領解して、正に眞實の行者たる可し。

●普賢とは、金剛薩埵の異名なり。胎金理智の二法身は、行者の清淨心蓮に、本より具はりと雖ども、三毒の爲に覆蔽せられて、理智の性德現はれざるを、凡夫と名け、三密の加持力に依りて、倶生の惑本を斷除し、本有の性德の顯現せるを、普賢金剛薩埵と名く。大日經疏第一に「普賢菩薩とは、普は是れ遍一切處の義、賢は是れ最妙善の義なり。謂く菩提心所起の願行、及び身口意、悉く皆な平等にして、一切處に遍せり。純一妙善にして、備に衆德を具す、故に以て名と爲す」と見ゆ、是れ其名義なり。

一段の意は、次に金剛頂經に示す所の五相成身觀とは、一に通達心、二に菩提心、三に金剛心、四に金剛身、五に證無上菩提、即ち是なり。「此五相の秘觀は、顯教より見れば、初地以上の菩薩の修行方法にして、密教より說けば、行者始て淨菩提心の相を證見したる當初よりの行法の次第なり。五相成身觀は、釋迦菩薩、入密以來行じ玉ひし作法にして、末學の人は、皆な釋迦菩薩を以て、模範的行者と爲すなり。釋迦菩薩は、十方諸佛の開示に依りて、五種の修行の階位を經て、本尊の身を證悟し、普賢金剛薩埵の身を獲得せられたり。今行者、釋迦菩薩の修行法に依りて行せば、自身本具の性德を開顯して、普賢菩薩の身を證得す可し。行者、既に此境致に進まば、十方三世の諸佛菩薩は、皆な自身と等同なるに至らん。又修行と證悟とは、前佛後佛、過現未の三世に於て、明に前後次第ありと雖ども、自心の本際に達悟すれば、三世の差別なく、前佛後佛の

隔歴もなく、平等平等ならん。

凡夫の心は、合蓮華の如く、佛心は、滿月の如し、此の觀、若し成すれば、十方國土の、若は淨、若しは穢、六道の含識、三乘の行位、及び三世の國土の成壞、衆生の業の差別と、菩薩の因地の行相と、三世の諸佛、悉く中に於て現じ、本尊の身を證して、普賢の一切の行願を滿足す。故に大毘盧遮那經に云く、是の如くの眞實心は、故佛の宣說し玉ふ所なり。

（講義）凡夫の心は合蓮華の如しとは、凡夫は如來の悲智の二德を具ふるも、其は單に潜在的に存するのみにして、恰も合蓮華の如きなり。之れに反して、諸佛の悲智の二德は、發して四佛四菩薩醍醐の果德と顯はれ、恰も大白蓮華王が、淸香を萬里に放て、四方を薰淨するが如し。故に佛心を開敷蓮華に喩ふるなり。大日經疏第四に「即ち自心を觀して、八葉の蓮華と作す、阿闍梨の云く、凡人の汗栗馱心の狀は、猶ほし蓮華の合して、而も未だ敷かざる像の如し、筋脉有て之を約して、以て八分と成る。男子は上に向き、女人は下に向く。先づ此蓮を觀して、其をして開敷せしめて、八葉の白蓮華座と爲し、此臺上に當に阿字を觀して、金剛の色と爲し、首の中に百光遍照王を置て、而も無垢眼を以て之を觀ずべし。此を以て自ら加持するが故に、即ち毗盧遮那の身と成るなり。此の方便を以て、毗盧遮那佛身を觀して、我が身と無二別別ならしむ」と示す。尚ほ委曲は、大日經疏第十二を見よ。成壞とは、成住壞空の四相を意味す。因地とは、因位にて、三賢十地等の修行の階位を指す。大毗盧遮那經とは、同經第三の成就悉地品第七の文なり。彼經の具文に「𠷐字を眼界に爲せ、輝燭は明燈の如し、頸を俛せ、小しく頭を低れ、舌を齶の間に近けて、而して以て心處を觀せよ。當に心に等引を現ずべし、無垢にして妙淸淨なること、圓鏡の如くにして常に現前す。是の如くの眞實心は古佛の宣說し玉ふ所なり。心の明道を照了するの時は、諸色皆な光を發す。眞言者、當に正覺兩足尊を見るべし云云」と示すは、即ち是れなり。眞實心とは、我等凡夫の自心の實際にして、即ち淨菩提心是れなり。故佛とは、先佛と云はんが如し。或又修生顯得の大日に對比して、本有常住の大日を指して故佛と稱す。

一段の大意は、諸佛菩薩の靈眼に照す時は、凡夫の心は、恰も合蓮華の如く、佛陀の心

は、開敷せる大白蓮の如し。又凡夫の心は、初月の微に光を發するが如く、心性の德、僅かに現はれ、佛心は滿月の如く、心性の德、普く十方法界涯を照燿す。是の如く心の實相は、行者、阿字觀を修して、始めて實證することを得可し。行者、若し如法如實に、阿字月輪觀を修して、自心の實相を證悟すれば、十方國土の、若しは淨善の法、若しは穢惡の法、一として其眞實際を透觀し得ざるなく、六道に輪廻する有情類、三乘行位の次第、三世の國土の變遷の相、衆生の善惡業の差別、菩薩因位の修行相、更に進んで三世の諸佛に至るまで、悉く行者の心月輪中に顯現せざるはなし。行者既に此幽致に達すれば、本尊大日の身を證得し、普賢菩薩の有ゆる行と願とを圓に成就したるものなり。故に大日經第三には、是の如くの眞實心は、前來の諸佛、既に宣說し玉ふ所にして、今新に發見せるものに非ずと明記す。

## 六、行者に對する勸誡

問ふ前きに、二乘の人は、法執あるが故に、成佛することを得ずと、今復た菩提心の三摩地を修せしむるとは、云何んが差別せん。

答ふ、二乘の人は、法執あるが故に、久々に理を證し、沈空滯寂して、限るに劫數を以てし、然も大心を發し、又散善門の中に乘じて、無數劫を經、是の故に厭離す可きに足れり、依止す可らず。今眞言行人は、既に人法の上執を破して、能く正く眞實の智を見ると雖ども、或は無始の間隔の爲めに、未だ如來の一切智々を證すること能はず、故に妙道を欲求し、次第を修持して、凡より佛位に入る者なり。

（講義）
二乘の人は法執あるが故にとは、聲聞緣覺の二乘は、人執品の惑を斷盡すと雖ども、五蘊十二處、即ち現象界を構成する原理は、實有なりと妄執するが故に、五蘊の法に執着する惑ありと云ふ。久々に理を證すとは、聲聞は、三生六十劫、緣覺は四生百劫の時分を經過して、始めて涅槃の理を證するを意味す。沈空滯寂とは、二乘の人、無餘涅槃に執着して、進取向上の心なきを指す。限るに劫數を以てすとは、二乘定性の人が、無餘涅槃中に經過すべき時間に限量ありて、必ずしも此所定の時間を經過せ

ざれば、廻心向大せざるを云ふ。**散善門**とは、散亂麁動の禪觀にして、顯敎の一心のみを淨めて、其他を知らざる觀門を指す。**無數劫**とは、菩薩の三大無數刼を經て、始めて佛果を證するを云ふ。**無始の間隔**とは、無始の初より、凡聖隔てありと妄執せる、極めて微細なる惑性を指す。密家にて之を極細妄執と名け、顯敎には元品の無明と云ふ。

一段の意は、問ふ前の勝義の章に於て、聲緣の二乘は、法執あるが故に、成佛することを得ずと說けり。今眞言行人に、菩提心三摩地法を修せしむるは、是れ法執にはあらざるか、如何ん。答て曰く、二乘の人は、法執あるが故に、三生六十刼、若しくは四生百劫の長歲月を經て、始めて人空の理を證悟すると雖ども、其結果、彼等は無餘涅槃に入りて、寂靜無爲に執滯して、更に向上の勇猛心なし、加之、八萬劫又六萬刼等の時分を經て、始めて沈空の眠りより覺め、是より大乘菩薩の修行に入り、而も散亂麁動の禪定を修し、三大無數劫の長歲月を過ぎて、始めて成佛すと說く。之を眞言の即身成佛に比するば、敎法の優劣、豈に同日の談ならんや。既に上述の如くなるが故に、勝慧利根の大器は、決して斯の如き法に執着す可らず、又依止す可らずと警告し玉ひき。然るに、今利根大器に對して、瑜伽法を修せよと勸誡するは、行人に既に法執なきが故に、五相三密の觀を修せしむるも、決して法執に墮することなきなり。且つ其れ、無法執の人に、五相三密の觀を修せしむるは、根本の一惑を斷除せしめんが爲めなり。眞言行者は、入壇灌頂の時に於て、既に人法の二惑を斷盡し、又正知見を得ると雖ども、無始劫來より薰じ來りたる一惑ありて、凡聖一如の極理に、尙ほ一分の疑闇ありて、如來の一切智智を證得すること能はず。故に五相三密の祕觀を修す。是の如く、此祕觀を修すと雖ども、既に法執なきが故に、二乘の人と同一に論ず可らず。

即ち此三摩地は、能く諸佛の自性に達し、諸佛の法身を悟り、法界體性智を證して、大毘盧遮那佛の自性身・受用身・變化身・等流身・を成す。爲く、行人未だ證せざるが故に、理宜しく之を修す可し。故に大毘盧遮那經に云く、悉地は心より生ずと、金剛頂經に說くが如く、一切義成就菩薩、初めて金剛座に座し、無上道を取證して、遂に諸佛の此心地を授くることを蒙て、然して能く果を證す。と、

(講義)

**諸佛の自性**とは、胎藏曼荼羅の理法身を指す。**諸佛の法身**とは、金界曼荼羅の智法

身の大日を云ふ。法界體性智を證すとは、諸法法界を照す所の一切智智を證得するを意味す。略出經第三、並に祕藏記參着せよ。大毘盧遮那佛云々とは、法界體性の智用を具有する佛格なり。謂ゆる大毘盧遮那佛とは、萬德圓滿の佛身の總格にて、下に列記する自性身受用身等は、此總佛格の差別的顯現なりと見るを得べし。自性身とは法界即ち諸法の本不生際に安住する佛身にして、之を理法身の大日と名く。受用身とは、之れに自ら法樂を受用する身と、及び他をして法樂を受用せしむる身との二種の法身あり。倶に法樂を受用するを主とするが故に、智法身と名く。變化身とは、降魔成道等の八相に身を變現して、衆生を敎化し玉ふ身にして、釋尊の如き、即ち其一なり。等流身とは、人天鬼畜等の有ゆる有情類を、一佛乘に誘引せんが爲めに、其等の有情類に等同流類の身相を現じ、彼等の喜見の身を現じ、彼等の言音に同じて、說法敎化する佛身を云ふ。大日如來は、群類を一佛乘に導かんが爲めに、四種の身相を現して、方便敎化し玉ふ。四身說法敎化の相は、各々異なれりと雖ども、而も其本體は、同一性體なり。雜問答に「凡そ此心王毘盧遮那、塵沙心數の內證智の眷屬の曼荼羅法身は、法界に周遍して、一切衆生趣の中に、應度の者に隨て、是の如くの自證の法門を說く、是を祕密乘と名く、治國の聖王、國土を守護し、人民を化するが故に、國堺の內に、諸の賢臣を散して、治化賞罰するが如し、四種法身、法界に周遍して、衆生を利益することと、亦復是の如し。彼四種法身は、法界に周遍して、內中外の異りありと雖ども、然も一相一味平等の法身なり云々」と見ゆ、是れ即ち四身同體なるを證するものなり。大毘盧遮那經とは、同經第三の悉地出現品第六の文なり。其具文に「祕密主、若し方便を具する善男子善女人は、樂求する所に隨つて、而も作す所あり。彼れ唯心自在にして成就することを得、祕密主、彼愚夫は、能く眞言と、諸の眞言の相とを知るに非ず、何を以ての故に、因は作者に非ざれば、彼果は則ち不生なりと說く、此因、因すら尙ほ空なり、云何んが而も果あらんや。當に知るべし、眞言の果は、悉く因業を離れたり。乃至身に無相の三摩地を證觸するときは、眞言者、當に悉地は心より生ずることを得べし」とあり。悉地(Siddhi)は梵語にして、願望を成就する意なり。今は妙覺の位を證成するを云ふ。心とは、行者の自心を指す、意は悉地成就は、他より入り來るものに非ずして、自心より出生する義を明す。金剛頂瑜伽經とは、三卷の敎王經の中の第一卷の文意なり。彼具文に「婆伽梵、大菩提心普賢大菩薩、一切如來の心に住し玉ふ、時に、一切如來、此

佛世界に滿ち玉へること、猶ほし胡麻の如し、爾の時に一切如來雲集して、一切義成就菩薩摩訶薩の、菩提場に坐し玉ふに往詣して、受用身を示現して、咸な此言を作し王ふ。善男子、云何んが無上正等覺菩提を證するや、一切如來の、眞實に諸の苦行を忍ぶことを知らずや。時に一切義成就菩薩摩訶薩、一切如來の警覺に由て、阿娑頗娜伽三摩地より起て、一切如來を禮して、白して言く、世尊如來、我れに敎示し玉へ、云何んが修行せん、云何んが是れ眞實なるか、是の如く說き巳て、一切如來、異口同音に、彼菩薩に告て言く、善男子、觀察自心三昧に住して、自性成就の眞言を以て、自ら恣に誦すべしとあり。今は此意を略說す。此心地とは、觀察自心三昧、即ち阿字月輪觀を指す。

一段の意は、此阿字月輪觀を修習する人は、諸佛自性の境界たる理法身を證し、諸佛法身の幽境に達し、阿字本不生際を照す智を證成し、斯くて福智圓滿の大日如來の身を體得し、或は諸法の本際に住して、自性身と現はれ、或は法樂を享受する受用身、或は人天の應化佛、或は三惡趣に應同する等流身を變作して、普く一切有情を攝取す。斯の如き神變不思議力は、皆な自心の寶藏より出生す。初入眞言行人は、未だ此理を證せざるが故に、須らく此妙法門を觀修せざる可らず。大日經第三には、悉地は、心より生ずべきものなりと示し、金剛頂經には、釋迦菩薩、曾て菩提導場にありて、端坐思念し玉ひし時に、空中に無量の諸佛現はれ、菩薩に觀察自心三昧に住すべきを示し玉ひき。爾の時、菩薩は諸佛の敎示し玉へたるが如く、月輪觀に入り玉ひしかば、久しからずして、正知見を得て、佛果を得玉へりと云ふ。此說は、攝眞實經第二、守護國界主陀羅尼經第九等にも明記す。大日經、並に金剛頂經に示す所は、佛果は、外に求むべきものにあらずして、行者自心の內秘に存在す。此內秘を開く鑰は、即ち阿字月輪觀に外ならずと云ふ意なり。

凡そ今の人、若し心決定して、敎の如く修行すれば、座を起たずして、三摩地現前し、是に本尊の身を成就す可し。故に大毗盧遮那經、供養次第法に云く、若し勢力の廣く增益することなくば、法に住して、但し菩提心を觀すべし、佛此中に萬行を具して、淨白純淨の法を滿足すと說き玉へり。此菩提心は、能く一切諸佛の功德の法を包藏するが故に、若し修證し出現すれば、則ち一切の導師と爲る。若し本に歸すれば、即ち是れ密嚴國土なり、座を起たずして、

能く一切の佛事を成す。菩提心を讃して曰く、若し人佛惠を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に、速に大覺の位を證す。

（講義）今の人とは、末法の我等衆生を指す。顯教には、正像末の三時を立て、末法は道果を證するものなしと云ふ(仁王經疏下三を見よ)。然るに、此は應化身の法教に於て、三時の次第を立つ、大乘同性經卷下に「如來は顯現して、兜率より下りて乃至住持せり。一切の正法、一切の像法、一切の末法、是の如くの化事は、皆な是れ應身なり」と示す。由是觀るも、正像末の三時は、獨り應身の教に就てのみ説かれたるを證するに足らん。高祖大師は「機根絶々たり、正像何ぞ論ぜん」と説き玉へり。密教は法身の法教なるが故に、三時を論ぜず、信修するものあれば、皆な諸願を成せん。供養次第法とは、大日經第七卷に當る。今所引の文は、學處品第一にあり。經の第七卷は、龍樹菩薩が、南天鐵塔前に感見し玉ひたる要略念誦經と、同本異譯なり。故に今は譯者の便宜上より、大日經第七を引く、實は菩薩感見の要略念誦經ならざる可らず。若し勢力の廣く增益するなくば云々とは、今具文を擧ぐれば「淨菩提心の如意寶は、世出世の勝希有を滿す。疑を除けば、究意して三昧を獲て、自利利他、是に因て生ず。故に應に守護せんことを身命よりも倍すべし、觀すれば廣大の功德藏を具す。身に、意に、衆生を燒すが如きは、下も少分に至るまで、皆な遠離すべし。異の方便の濟ふ所多くして、內は悲心に住して而も瞋を現すを除く、恩德に背く有情類に於ても、常に忍辱を行して、過を觀ぜざれ。又常に大慈と悲と及び喜と捨との無量の心を具足して、力の能ふ所に隨て、法食を施し、慈の利行を以て、群生を化せよ。或は大利相應の心に由て、時を俟つ爲めの故に而も棄捨せず。若し勢力の廣く饒益すること無くば、法に住して、但し菩提心を觀すべし、佛此中に萬行を具し、淸白醇淨の法を滿足すと說き玉へり」とあり。法に住してとは、五相三密の修行の法則に依るを云ふ。此の中に萬行を具すと云へるは、淨菩提心中に、諸善萬行の具はれる意なり。大日經住心品第一に「祕密主、此菩薩の淨菩提心門を初法明道と名く、菩薩此れに住して修學すれば、久しく勤告せずして、便ち除一切蓋障三昧を得。若し此を得れば、則ち諸佛菩薩と同等にして住し、當に五神通を發し、無量の言音陀羅尼を獲て、衆生の心行を知り、諸佛護持し、生死に處すと雖ども、而

も染着なく、法界の衆生の爲めに勞倦を辭せず、住無爲戒を成就し、邪見を離れ、正見に通達すべし」と示し。又大日經疏第二に「眞言行者、初め淨菩提心に入れば、未だ無數阿僧祇劫に於て、具に普賢の衆行を修し、大悲方便を滿足せずと雖ども、而も此等の如來の功德は、皆已に成就せり。何を以ての故に、卽ち是れ毗盧遮那の具體法身なるが故なり。是を以て、經には無量無數刧、乃至智慧方便、皆な悉く成就せりと云へり」と說く。此等の證文は、皆な是れ淨菩提心に、諸善萬行の德の具足せるを明すなり。修證し出現すとは、行者、阿字淨菩提心の淨月輪觀に住し、自心の實相の明體を證見するを云ふ。本に歸るとは、衆生の自身の本宅は、覺悟の境界を指す。我等凡夫は、自身の本宅に迷て、三界に流轉し、地獄天道等に浮沈すと雖ども、一旦自身の本宅に歸り、自心の實相を證悟すれば、生死に於て自在を得るに至らん。密嚴國土とは、大日法身の三密を以て莊嚴せらるる國土と云ふ意にして、大日法身の住し玉ふ樂土を指す。密嚴淨土略觀に「夫れ密嚴淨土とは、大日心王の蓮都、遍照法帝の金刹、祕密莊嚴の住處、曼茶羅淨妙の境界なり。形體廣大にして虛空に等同なり、性相常住にして、法界に超過せり。十方の淨土を前裁と爲し、諸佛の妙刹を後園と爲す。萬尊の身土、陰陽に布列し三身の依正、乾坤に遍滿す。成るに五輪種智の自性を以てし、嚴るに三密萬德の已體を須てす。一實心地の上には、七金山有て而も圍繞し、七覺法嶺の間に、八功德海有て、以て彌漫せり。海中に大悲の金龜あり。龜の上に淨識の寶蓮開け、臺の上に須彌あり、山頂に曼茶あり、其山は則ち淨妙法身の全體、大菩提心の正相なり云々」とあり。佛慧とは、菩提心の眞知を指す。父母所生の身云云とは、現在世に於て、成佛することを示す。大日經疏第二に「知るべし、餘敎の中の菩薩の如きは、方便對治道を行し、次第に漸く心垢を除き、無量阿僧祇劫を經て、或は菩提に至ることを得るあり、或は至らざる者あり、今此敎の諸の菩薩は、則ち是の如くならず、直に眞言を以て乘と爲して、淨菩提心門に超入す。若し此心の明道を見る時は、諸の菩薩、無數劫中に修する所の福慧自然に具足す」と說く。是れ卽身成佛の證と見ることを得可し。

一段の意は、末世の我等凡夫と雖ども、若し固く決心して、如來の法敎の如くに隨順修行すれば、其行法の座を起たざるに、直に菩提心の眞相現前し、是に於てか、行者は本尊の大日の萬德を具備し、眞に凡佛一如の深觀妙旨に悟入するとを得べし。故に大日經供養次第法には、若し行者にして資財に乏しく、且く學識なくして、多くの人

々を敎化利益すること能はざる時は、須らく儀軌法則に示すが如く、阿字月輪觀を修すべし。大日法身は、此月輪觀中に、諸善萬行を悉く込め玉ふが故に、專念一向に月輪觀を修すれば、一切の敎義、自ら解領し、一切の諸佛の功德、行者の身中に聚來し頓に心性の靈光を直感し、心の密嚴國土を開顯し、一切世間人天の導師と仰がれ、大法輪を轉ずることを得べし。故に菩提心を讃する偈には、若し人有て佛智を求め、阿字月輪觀を修し、淨菩提心の實相に通達悟入すれば、父母所生の肉身に於て、速に大覺法王の寶位に登ることを得んと言へり。

## 發菩提心論講義畢

# 菩提心論講義索引

## 阿　行

廻心向大 三五、
因地 一一、九一、
阿字本不生際 七九、
一指量 八一、
圓明淨識 八三、
阿耨多羅三藐三菩提 二、
縁覺 二九、
阿字素光 八一、
一肘 八一、
阿字月輪觀 九二、
一切智 一九、
阿闍梨 六、

## 加　行

合蓮華 九〇、八二、
金剛薩埵 六、五七、八九、
灰身滅智 三四、
虛空の相 四六、
五欲 二五、
合識 一五、
契印 八五、
五相成身 八六、
闕而不書 一三、
華嚴經 一七、五〇、
外道 二六、
化城 三五、
供養次第法 一〇〇、
故佛 九一、
五陰 三一、
行願 一五、
月輪 六〇、

## 佐　行

四種法身 九六、九八、
眞言法 一二、
四諦 二九、
總持 三、
即身成佛 一二、
四波羅蜜菩薩 六九、
寂靜智 八一、
悉地 九七、
心質 七四、
三摩地 一二、五七、六〇、
聲聞 二九、
散善門 九四、
眞如智慧 一八、
淨法界 五九、
十地の菩薩 四〇、
十六分 六三、
四佛智 六九、
勝義 二三、
眞言 八五、
眞勝義諦 八三、
執着 一八、
眞實心 九一、
上根上智 七、
十二因縁 三〇、

自然智 一九、　仙宮 二七、
衆生執 三二、　正像末 一〇〇、
寺 四、　沙門 四、
實相般若波羅蜜多海 六〇、旨陳 四一、
四大 三一、　三毒 二四、
十六大菩薩 七三、　三藏 四、
心 二、

多　行

大毘盧遮那經 五五、　大山王 五一、
大日經疏 八〇、　展轉 四二、
大興善寺 四、

奈　行

如來藏 一六、

岐　行

菩薩 三、　普賢菩薩 八九、八八、

奉詔譯 五、　八葉白蓮 八〇、
白蓮 八一、　法執 三三、
普賢の心 六〇、　凡夫 二四、
本尊 八七、　毘盧遮那佛 六七、
菩提心 一、五七、　不空 五、

麻　行

魔宮 七、　迷津 四五、
無相 四六、　無覺了 五九、
無礙智 一九、五一、　妄想 四三、
無上覺 五一、　密嚴國土 一〇二、

奈　行

瑜伽 二、三九、八五、

良　行

龍猛菩薩 三、二二、　六趣 四二、
利益 一六、　輪廻 四三、

大正貳年六月廿日印刷
大正貳年六月廿二日發行

定價金四拾錢

不許複製

著作者　神林隆淨
東京市小石川區大塚坂下町十七番地
發行者　内川秀應
東京市小石川區大塚坂下町十七番地
印刷者　伊豆宥法
東京市神田區中猿樂町四番地
印刷所　秀光舍印刷所

發行所　東京小石川區大塚坂下町　振替（東京）三〇九五番　加持世界社

—（近刊豫告）—

豐山大學長　權田雷斧僧正著

雷斧叢書第二編
# 十八道私記

本月下旬發行
菊判三百八十余頁
正價七十五錢
郵稅八錢

雷斧叢書第一編は既に高評を博して殘部僅かとなり、今や第二編を生むに至れり、是れ元より密教に造指深き權田僧正の更らに多年の蘊蓄を傾倒し、編輯せられたるもの又以て斯道の研究と實修とに資するや實に大なり今や出版の日近し諸師刮目して待たれよ

發行所　東京小石川區大塚坂下町十七番地　加持世界社　振替東京三〇九五

324
348

終